

鄭氏政権期における台湾とフィリピンの貿易関係

—マニラ税関記録を中心に—

国立臺北教育大學臺灣文化研究所 方 真真

(日本語訳) 長崎大学多文化社会学部 賈 文夢

長崎大学多文化社会学部 野上 建紀

Trade relations between Taiwan and the Philippines during the Koxinga administration
—viewing from Manila Customs Records—

FANG Chenchen (National Taipei University of Education)

Japanese translation by JIA Wenmeng (Nagasaki University) and

NOGAMI Takenori (Nagasaki University)

研究資料

要 旨

本論は主に17世紀のスペイン植民地のマニラにおける税関記録を用いたものである。筆者は1664年から1684年の間に台湾からマニラに到ったことが登録された51隻の船の文書中に記載された各貨物の種類、個数と価格を改めて分類し、図と表の形式で一つずつ列挙した。これらを元に鄭経、鄭克爽の時期における台湾とフィリピンの貿易関係を分析した。その他、輸出された貿易商品の種類と産地などをまとめ、その他の10隻の船の文書を元に、鄭氏政権期の台湾と東アジアの貿易状況と国際貿易ネットワークの変化を検討した。

本論の結論は以下の通りである。(1) 1664年から1684年までの間、清の海禁によって中国の沿海貿易が途絶えたものの、台湾とフィリピンの貿易はかえって好況となった。この20年の中で特に1670年が通商記録、貿易量ともに最も多く、毛布、麻、生糸、鉄、sayasayas、小曳網紐、綿花、紙、煙草や陶磁器の輸出も最も多い。(2) 1674年に三藩の乱が起って1680年に鄭経が撤退して台湾に拠るまでの間、台湾から毎年フィリピンに行く商船の貿易は戦乱の影響で明らかに衰退した。この状況は鄭氏政権の時代が終わるまで引き続き変わらなかった。(3) 鄭経が敗退して台湾に帰ると間もなく、即ち1681年以降、台湾からマニラまでの商品は大きく変化した。貿易額の多寡や種類に関わらず、いずれも以前より貿易量が少なくなり、商品の内容は多様化した。輸出品の中でも取引の多い絨毯(毛布)や麻の数量も1681年以降、減少した。金属類については、この年から、鉄の輸出が銅、銀や鉛に取って代わられた。そして、小曳網紐も麻縄紐と白糸に取って代わられた。一方、*quita*、犁に用いる木棒、麵、日本酒、日本の小机、葛籠、碗と *chita* など少量の輸出品がこの年からフィリピンに輸出され始めている。(4) 鄭氏の主要な対外貿易相手は日本であった。

これ以外にも中国、フィリピン、コーチシナ（交趾支那）¹やその他の東南アジアの国々及びイギリス、オランダなどが鄭氏の貿易相手であった。また、中国と鄭氏一派の貿易について、三藩の乱以前においては、鄭経は安海との貿易によって中国商品の運搬を行なった。三藩の乱の間は、鄭経はアモイを占領し、アモイ貿易を利用するが、安海との貿易もまだ続いていた。その後、三藩の乱が平定されると、安海の貿易の地位は完全にアモイに取って代わられることになる。清朝の海禁政策及び鄭経と中国の間の政局の悪化は、対日貿易の縮小にそのままつながった。日本の商品は鄭氏一派と東南アジア貿易の主要な中継商品であったため、対日貿易の減少は東南アジア地域に対する貿易額をも相対的に縮小させ、中継貿易の商品の大幅な調整が行われることになった。

キーワード：台湾、フィリピン、貿易、舢舨²

Abstract

This paper shows you trade relations between Taiwan and the Philippines based on the customs records in Manila at the Spanish colonial period in the 17th century. The author reclassified the type, quantity and price of each item of cargo described in the documents of 51 ships registered to have arrived in Manila from Taiwan between 1664 and 1684. Based on these, the author analyzed the trade relationship between Taiwan and the Philippines during the period of Koxinga (Zheng Chenggong) and Zheng Jing. In addition, the author discussed on the changes in the cargo trade situation and international trade network in Taiwan and East Asia during the Koxinga administration.

1 はじめに

1566年に聖アウグスチンの修道士アンドレス・デ・ウルダネータが北部太平洋にアジアからアメリカ大陸までの比較的安全で早い帰還路を発見した後、ガレオン船がメキシコのアカプルコとマニラの間を極めて頻繁に往復し、250年間にわたってフィリピン、中国、メキシコ間の三角貿易が行われた。マニラには三つの貿易ルートがある。一つはインドシナ半島との貿易ルートであり、このルートではアラビア、ペルシャ、インドの商品が集められる。一つは中国との貿易ルートであり、もう一つは日本に至る貿易ルートである³。アジアの商品はマニラで売られた後、マニラからメキシコへと運ばれた。17世紀のフィリ

1 フランス統治時代のベトナム南部を示す歴史的呼称。

2 舢舨（サンパン sampan）。中国南部や東アジアで使用される平底の木造船の一種。

3 Carlos Prieto, *El Océano Pacífico: Navegantes Españoles del Siglo XVI* (Madrid: Alianza Editorial, 1975), pp.92-95.

ピンは東と西の世界が交わる位置にあったため、マニラは各地の商人を引きつけた。そのため、現地のスペイン人と中国人はこの商業貿易で生計を立てた。

一方、当時の台湾は、1661年に鄭成功が兵を送ると、清朝は沿海住民と鄭氏の往来を阻止するために全面的に「遷界」した。この命令は鄭氏の勢力に対抗するために、そのすべての商業往来を断ち切って、徹底的に鄭氏に対する支援を封鎖するものであった。海禁政策は、1683年に鄭氏政権が消滅するまで続いた後、撤廃された。この政策は確実に台湾経済を封鎖する効果を発揮し、台湾は中国に対する貿易利益を失い、台湾の商品の供給源に関わる大きな問題となった。しかし、台湾は経済危機に直面した際、この苦境を打開するための対策や貿易を転換する方法を模索し、実際には、鄭成功の死後、鄭経は積極的に海外貿易を推進している。1670年にイギリスのバンテン（Bantam）支社は、鄭経が各国に対して台湾に来て貿易するように招いた書簡を受け取っている⁴。つまり、中国との貿易が途絶えた後、鄭氏は日本、マニラ、その他の東南アジアを相手にした貿易に転向したのである。

鄭氏政権と東南アジア貿易に関する研究成果は非常に限られている。その中で鄭瑞明は主に鄭氏政権がどうやって東南アジア貿易を発展させたか、どのように市場開拓していったのか、そして、東南アジアの外国商人、華僑商人がどのように様々な貿易をおこなったかについては検討しているが、貿易額、貿易利益などの問題については言及していない。鄭瑞明は鄭経、鄭克爽らが鄭芝龍、鄭成功以来の鄭氏海上集団の東アジア勢力を引き継いでいると考え、盛大な海上貿易を行っていたとしている⁵。また、頼永祥と曹永和は、鄭氏とイギリスの通商関係を検討している⁶。楊佳瑜は前述の研究者の成果をもとに発展させ、鄭氏の国際貿易を検討している⁷。そして、李毓中のみが鄭氏とフィリピンの貿易を専門に研究し、また、キリスト教カトリックとの関係や様態に言及しており、それは主にフランスの学者 Pierre Chauna によって1960年に発表された研究成果である *Les Philippines et le Pacifique des Iberique (XVI^e, XVII^e, XVIII^e siècles)* の中の統計数字をもと

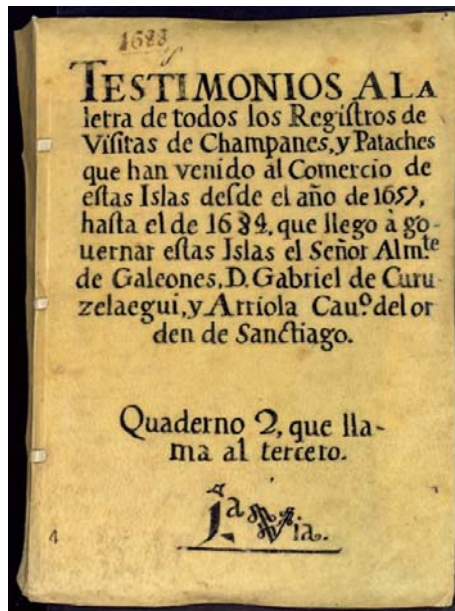
4 周學普譯，《十七世紀臺灣英國貿易史料》（臺北：臺灣銀行經濟研究室，第57種，1959），頁5。

5 鄭瑞明，〈台灣明鄭與東南亞之貿易關係初探－發展東南亞貿易之動機、實務及外商之前來〉，《師大歷史學報》，14（1986），頁57-108。

6 頼永祥，〈鄭英通商略史〉，《臺灣文獻》，4：4（1954），頁13-26，以及〈臺灣鄭氏與英國的通商關係史〉，《臺灣文獻》，16：2（1965），頁1-50。曹永和，〈英國東印度公司與臺灣鄭氏政權〉，《中國海洋發展史論文集第六輯》（臺北：中研院人文社會科學研究中心，1997），頁389-405。

7 楊佳瑜，〈從英國東印度公司史料看鄭氏來台後國際貿易地位的變化（1670-1674）〉，《臺灣風物》，48：4（1998年12月），頁19-50。

に鄭氏政権期のフィリピンとの貿易を分析している。しかし、証拠がやや不足しており、商品と貿易額についても言及されていない⁸。そして、李毓中と楊佳瑜は鄭氏政権期の貿易活動は衰退したと考えている。鄭氏と東南アジアの貿易増減の詳細については、鄭瑞明、楊佳瑜、李毓中三人のいずれの論点においても、直接的な証左がない。鄭経や鄭克爽の時期の台湾とフィリピンの貿易については、直接、マニラの税関記録から研究を始めるべきであるが、今は関連資料がない。今回、筆者が採用したこのスペインの文献は鄭経や鄭克爽の時期の台湾からフィリピンまでの商船数、商品の種類や数及び貿易額を把握するだけでなく、鄭氏政権期の対外貿易の変化も裏付けることができるものである。



1688年にまとめられたマニラ税関の登録台帳表紙

2002年8月にスペインのセビージャ（Sevilla）のインディアス総合古文書館（Archivo General de Indias, 略AGI）で、1688年にまとめられたマニラ税関の登録台帳を発見した。この台帳には1657年から1684年の間にフィリピン諸島の交易地に到着した舢舨や小貨物船の出帆地、日付、船の種類、船主／船長、担当監督者、通訳者と証人だけでなく、さらに貨物の種類、件数と価格も詳しく説明している。この書冊の名称は長くて、その時の統治者の名前を列記している。正式名は「1657年から1684年までフィリピン諸島への舢舨と小貨物船の登録書類、諸島を治めるガレオン船の司令、サンディエゴ伝道所の騎士 D.Gabriel de Curuzelaegui y Arriola 師、第2本称第3本（*Testimonio a la letra de todos los registros de visitas de champanes y pataches que han venido al comercio de estas islas desde el año de 1657 hasta el de 1684, que llegó a gobernar estas islas el señor Almirante de galeones, D. Gabriel de Curuzelaegui y Arriola, caullero del orden de Sanctiago. Quaderno 2, que llama al tercero*）」で、表紙は羊皮紙で作られており、全部で618枚ある。両面に記されている。この本は中国、台湾、日本、コーチシナ、ドンキン、ジャム、カンボジア、バンテ

8 李毓中、〈明鄭與西班牙帝國：鄭氏家族菲律賓關係初探〉，《漢學研究》，16：2（1998年12月），頁29-57。

ン、マカッサルなどから入港する船が登録されている。この17世紀のスペインの史料は当時のフィリピンと他の東アジア地域との商品貿易の状況を研究するのに大きく役立つものであり、今の学界の鄭氏政権期の台湾の貿易状況を補足することができる。また、中国、日本と東南アジアの対外貿易についての認識も更に進めることができる。

1657年から1684年までの記録の中で大員(Tayguan/Taiguan/Taygoan, 今の台南安平)からマニラ湾への商船の実際の登録は1664年から始まっている。つまり1657年から1663年までの間の台湾からフィリピンへの貿易状況はこの重要な資料から知ることはできない。現在、知られているスペインの公式資料や他の史料は少ない上、断片的で不完全なものであり、当時の貿易全貌を復元することは難しい。しかし、公式の記載がないからと言って、これは1664年以前に台湾商人とフィリピンが非公式で取引していないことを意味するわけではない。1664年から1684年までの間、台湾からマニラに入港した船は全部で51隻であり、それ以外に10隻の入港船が台湾と間接的に関係している。

マニラ税関では、1657年から1684年までの間に登録された入港船が非常に多く、かつ東アジア各地から入港しているが、筆者は登録台帳の中で台湾の関する部分だけを整理して分析する。本論は上記のマニラ税関記録を用いて、筆者は1664年から1684年の間に大員を出帆地とする51隻の船の入港日や積載貨物を調べて、文書中に記載されている各商品の種類、個数と価格を改めて分類し、それぞれ図表の形式で列挙する。その上で鄭経、鄭克爽の時期の台湾とフィリピンの貿易関係を分析する。その他、貿易商品の輸出から商品の種類や産地などの分析を進め、その他の10隻船の記録を含めて、台湾の鄭氏政権と東南アジアの商品貿易の状況と国際貿易ネットワークの変化を検討する。

2 1664-1684年に台湾からフィリピンへの貿易船の入港回数と船舶数の分析

1664年から1684年までの間、台湾からマニラ湾に来航した船舶は全て舢舨(*champan*, 表1-2を参照)であった。*champan*の字音はマレー語に由来し、船の型式はアモイ船や福州船と異なり、底の部分が平らで、一本マストの種類に属している。それは南天書局が秘蔵している中国舢舨船(Champan, Bateau Chinois)の図像で確認することができる⁹。

9 参照『福爾摩沙—十七世紀的臺灣、荷蘭與東亞』(2003年故宮展覽會および出版物)、頁61。

しかし、このような一本マストの帆船は安定性が足りないようで、限られた積載能力の船で大員からマニラまでの間の海上貿易を行っていた。大員-マニラ、アモイ-大員や日本-大員を航行する舢舨船は、『唐船図巻』の中の台湾船の図像のようなものであった。これらの船の体型は当時のガレオン船とは全く異なっている。

この20年間、台湾からマニラに入港した船は全部で51隻である。付録表1-2の船主/船長を見ると、台湾とマニラの間を頻繁に往復する者がいる。*Tianqua* が最も多くて、7回往復している。*Anqua*、*Chussia (Chusia)*、*Diqua*、*Guanqua*、*Samsia*、*Sucia*、*Tonqua*、*Yuqua* は2回ずつ、その他の者は1回往復している。付録表の中で *Chinquá* と *Penqua* は中国から台湾に行く船主/船長と同一人物かもしれない。仮にそうであれば、この二人は台湾とマニラを往復するだけでなく、実際には中国、台湾、マニラの三角貿易活動を行っていたことを示している。この51隻船の寄港の主な目的は商業貿易である。ただし、1674年3月1日入港の舢舨は遭難後にマニラに寄港したもので、船の積荷は全て台湾に緊急に送り届けるべきもので、国王「世藩 (*Sipuan*)」への米であった¹⁰。また1680年5月2日の船は、フィリピンに世藩の境遇と部下が台湾に戻ってきたことを通知するためだけに来港している¹¹。この文書から台湾の商人とフィリピン当局はある種の互惠関係を維持していたことがわかる。時には現地のスペインの支配者に情報を伝えている。台湾の商人は貿易以外においても、台湾とフィリピン当局の間で重要な役割を果たしていた。1665年6月1日の文書には、*Sunqua* が地元の行政長官に手紙を携えてきたと記されている¹²。また、1682年2月18日に入港した船は、鄭克爽の命を仰せつかって、マニラの行政長官に手紙をもたらした。この手紙によりフィリピン当局は鄭經の死と台湾に関することを知ったのである¹³。

この台帳には他に台湾と間接的な関係がある10隻の入港船の記載がある。例えば、1671年9月5日、1683年1月11日、同年1月27日や1684年2月16日に入港した2隻の総計5隻は、もともと日本から台湾に行く予定であったが、天候不良のため、航路を外れてマニラに寄港していた。1672年12月31日と1677年3月20日に入港した船は全て更に小さな舢舨であり、加えて1679年1月24日と1684年2月7日に入港した計4隻の舢舨は、全て中国大陸

10 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 245r-245v. *Sipuan* とは鄭經である。文中では三藩の乱のことが述べられている。

11 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 323r-324r. 三藩の乱発生後の6年目、鄭經は敗退して台湾に戻っている。

12 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 179r-179v.

13 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 330v-331v.

から台湾に向かう途中、暴風雨のためか、或いは途中で遭難してマニラに到着したものである。1681年2月3日入港の舢舨は本当の出帆地の記載がなく、台湾からマニラに直接到ったものではないことがわかっている（付録表2を参照）。

この20年間の台湾からフィリピンへの貿易は3、4、5月が多く、その入港数は各11回、18回、9回である。中でも4月の入港回数は際立っていた（付録表1-1を参照）。当然、このことは当時の季節、気候や海況と密接に関係している。17世紀の東アジアは春夏の季節風が弱く、波が小さいことは明らかであり、台湾海峡では比較的穏やかに航行しており、冬ほど困難ではない。その時のフィリピンの3月、4月は暴風雨も稀で船の航行に適した気候であった。

資料にある1、2月にマニラに入港した10隻の船は、もともと中国大陸や日本から台湾に向かう予定か、途中で台湾に寄港する予定だった船であり、天候不良のため、特に暴風雨で航路を外れて、目的地に着けなくなり、マニラ湾に入ることになったことが史料に描写されている。付録表1-1、2から見ると7、8月そして10月、11月には台湾からマニラへの入港記録がない。この時期は台湾沿岸からマニラにかけて台風が盛んに発生するため、海外貿易には向いていないと推測される。

文献記録の日付は1657年から1684年までであるのに対し、台湾から来た商船が実際に記録されているのは1664年からである。これは当時の台湾情勢と密接な関係がある。1664年から1683年までの間は正に鄭經、鄭克爽が台湾を統治した時期に当たる。鄭經の統治以前の台湾は動乱の中にあつた。1662年に鄭成功はオランダ人の台湾統治を終了させ、同年にルソンも征討しようとしたが、計画が漏洩し、華人が虐殺されている。その他、イギリスの史料によると、鄭成功は台湾に移った後、東南アジアとの貿易を奨励していない¹⁴。この間、台湾の船は一切フィリピンに入っていないことがすべてを物語っている。

1664年に鄭經が撤退して台湾に拠った後、事態は徐々に平穩に戻り、台湾経営が始まった。しかし、清朝の経済封鎖はまだ続いており、鄭經は清朝の封鎖を破るために、日本や東南アジアと良好な関係を持った。折しも1666年、ルソンのスペイン人は台湾との間の緊張関係を緩和するために、修好関係を取り戻した。『台湾外記』の中には「八月、ルソン国王は巴礼僧を台湾に派遣して貢ぎに行く。鄭經は賓客としての礼儀で応対して、ルソン国王を懐柔した。巴礼僧は台湾で教会を建て、(カトリック教の)布教の許しを求めた。

14 楊佳瑜、「從英國東印度公司史料看鄭氏來台後國際貿易地位的變化（1670-1674）」，頁44。

陳永華は『巴礼の原名は化人、詐欺によって他国を占領している。台湾での布教は絶対に許さない。』と言った。鄭経は笑いながら『彼が私達の人と同化できるなら、私も彼らを同化できる』と言った。衣冠を与えて、自分の国の服を脱ぎ捨てて、賜ったものを着て参拝するように命令した。然もなくば首を切るといった。巴礼僧は服を着替えて、臣下の礼をとった。鄭経は『洋船でルソンに行つて取引するなら、金品を強請つて問題を蒸し返すことは許さない。毎年、船で貢物を納めること、貢物は舵でもマストでもかまわない。もし約束を破つたら、すぐ軍隊を派遣して罪を問う。』と諭す。巴礼僧はしきりに額ずき、布教の事は敢えて触れずに、巴礼を呂宋に帰らせた。」¹⁵と記されている。しかし、台湾の情勢は1683年になってまた新たな変化があり、清朝が施琅を派遣して海を渡つて台湾を攻略し、鄭克爽を投降させ、鄭氏一派の台湾統治が終了した。マニラ税関に登録された台湾船の入港年代の日付によると、1664年以後の20年間、清の海禁によって中国の沿海貿易が途絶えてから、台湾とフィリピンの貿易はかえつて好況となった。この20年の中で特に1670年の通商記録が最も多く、最大8回の入港があつた。4月1日には同じ日に3隻の舢舨船が入港している。次いで1665年の記録が多く、5回の入港があつた。1668年、1672年、1673年および1681年はそれぞれ各4回の入港があつた。注意すべきなのは、1664-1684年の間で、1669年だけはマニラ湾に入港した記録が全くない点である。また、付録表1-1を見ると、1674年に三藩の乱が発生してから1680年に鄭経が敗退して台湾に帰るまでの間、毎年、台湾からフィリピンに行く商船は1674年と1676年を除いて1隻のみしか見られず、戦乱の影響で、この時期の商業貿易は明らかに衰退している。

3 台湾からマニラに向けた輸出品の種類・価格の分析

51隻の入港船書類によれば、マニラ税関は船の貨物の申告に対しては非常に厳格であり、各項目の物品は全て真実を申告しなければならず、申告済みの貨物に印を付して、船主は税金を必ず納めなければならなかつた。もし船主あるいは船長が不正申告した場合、商品は全部没収された。夜間に荷物を運ぶことも禁止されており、違反した者は100ペソ (pesos) の罰金が科される¹⁶。気候の関係で途中、航路を外れて入港する船についても、積載した荷物を倉庫に預けて、税金を納めなければならなかつた¹⁷。船の入港手続き処理を簡

15 江日昇、『臺灣外記』（臺灣文獻史料叢刊第六輯，臺北：大通書局，1984），頁237-238

16 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 306r-306v.

単に行うために、マニラ税関は中国語（閩南語）ができる通訳者を一人ないし二人派遣して協力させた。この期間の主な通訳者は Domingo de los Ríos、Nicolás Ramires、Santiago de Vera、Ignacio Flores、Manuel de Ledo、Joan de Herrera、Thomas de Vera と Martín de Villafranca である。Ignacio Flores は字が読めないせいか、一回しか通訳をしたことがない¹⁸。

1664年から1684年までの間に、台湾の商船がマニラに持ってきた商品の種類について述べると、多くは原料、生活用品を主としたものであり、奢侈品も少量ある。これらの商品は mantas（布）¹⁹、麻が大口の商品であり、次いで鉄、生糸、sayasayas（紗綾）²⁰、麦、小曳網紐（hilo de chinchorro）²¹がある。carahayes²²、陶磁器（lossa/losa/loza）²³、紙、タバコはフィリピンへの輸入回数も多い。それ以外に少量の商品がある。銅、鉛などの金属類、犁に用いる木棒などの木材類、皿、碗、杯、鍋などの器具類、そして、砂糖、麵、日本酒、茶（cha）などの食品類がある。その他にも極めて少量の輸出品として、麻縄糸

17 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 387v.

18 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 186v.

19 本文の中の mantas について、現代のスペイン語では布団、毛布を指すが、16・17世紀のスペインの文献には別の意味がある。Melchior de Mançano の *Arte de la Lengua Chiō-chiu* 双語辞典の23、25、27、30ページによると、manta は布を指している（この辞書は万暦四十八年（1620）のもので、スペインのバルセロナ大学の図書館に蔵されている）。この文では多く綿布のことを指す。

20 単数形は sayasaya、複数形は sayasayas、sayasaías、saiasayas や saiasaias と書く。1671年5月11日の台湾貿易文書には、「2包の sayasayas de las chicas」（AGI, Filipinas, 64, vol. 1, folios.220v-222r. を参照）と書いているが、sayasayas は女兒用で、それは女性用のスカート、ペチコートなどの衣料である。もう一つの1685年5月15日の中国船申告書から花飾りがある sayasayas がベルトに使われていることがわかる。第2本の原稿からは、sayasayas の女性用下着や sayasayas で作られた傘があり、南京や中国で sayasayas が産することなどがわかる（AGI, Filipinas, 64, vol. 2, folios. 125v, 251r-253v, 340r, 354r, 355r, 356r. を参照）。それに、2冊の税関文書によると、sayasayas は白、肌色が多く、さらに赤、黄色、黒などいろいろな色があることがわかる。一般に単価は高く、多ければ4ペソ、少なければ12、15リアルまたは2ペソで、上等な織物であった。E. H. Blair と J. A. Robertson は、sayasayas は中国のシルクのスペイン呼称であると説明している（E. H. Blair & J. A. Robertson, *The Philippine Islands, 1493-1803*, vol.44 (Cleveland, Ohio: A.H.Clark, 1903-1909), p. 267. 参照）。sayasayas と saya は発音も似ており、同じ語彙らしい。これはフィリピンの女性がいつも穿いている tapis の中のスカートのことをそう呼んでいる。しかし、17世紀のマニラ税関文書に登場する sayasaya は、どのような過程で18世紀になって saya に変化したものか確認することはできない。saya はポルトガル語の saia の影響を受けたものかもしれない。何はともあれ、sayasaya とは絹織物の一種である。著者は「sayasayas」を「紗綾」と訳している。

21 曳網を作る麻の紐（漁網の一種類）（Real Academia de Española, *Diccionario de la Lengua Española*, tomo I (Madrid: Espasa-Calpe, 1992), p. 647. 参照）。

22 1668年以後、台湾からマニラまで輸出された carahayes の回数は少なくない。特に1674年5月4日と1682年以後の船舶文書には、輸入の数量と説明がついている。粗製のもの、大きいもの、小さいもの、中ぐらいのもの、広東からのものといった説明である。このマニラ税関の登録簿に多く見られる中国からの船の書類によれば、carahayes は「壺」の意味であることがわかる。その中の小型や中型の片耳壺は茶壺である。

(hilo de alcarreto)²⁴、筵、elefante (象という商標名の麻布)²⁵、胡椒、白糸、中国靴、石膏、犁、文具箱、choca²⁶、テーブルクロス、日本の小机、葛籠、chita (木綿更紗)²⁷、淡色 heda²⁸、黒色 rengues²⁹、中国の棕櫚扇 (paypayes de sangley)³⁰など多くの品目がある。

商品の内、例えば mantas (布)、太物、生糸、sayasayas (紗綾)、小曳網紐や胡椒などは、その数と価格について、1665年から1678年までの間の大部分が完全なリストとして残っ

台湾船がフィリピンに輸出した carahayes の到着日一覧

1668/3/24	1670/4/3	1672/5/14	1674/5/22	1682/4/15 (60大、150小)
1668/4/5	1670/4/14	1673/1/19	1675/3/10	1683/6/3 (50広東中)
1670/2/19	1671/5/11	1673/5/27	1676/4/18	1684/1/31 (50大)
1670/3/29	1672/3/16	1673/5/29	1681/1/8	1681/3/4 (50大、100小)
1670/4/1	1672/4/19	1673/6/5	1681/2/3	
1670/4/1	1672/4/28	1674/5/4 (粗製)	1682/2/18 (25中)	

(資料の出所は AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 197v-198v, 199r-200v, 205v-207v, 209v-210v, 211r-212v, 214v-215v, 216r-217v, 218r-220r, 220v-223r, 225r-226r, 226v-227v, 228r-229r, 229r-230r, 236v-237v, 240v-241v, 242r-243r, 243v-244v, 246v-248r, 251v-253r, 256r-257v, 265v-266v, 324r-325r, 325v-326v, 330v-332r, 337v-338v, 389v-390v, 435v-436v, 440v-441r.)

- 23 lossa を除いて、文書の中に見られる losa, loza などの表記の異なる 2 種類の語彙について、18世紀初めのスペイン語の辞典には「losa」は「タイル」の意味であることが説明されており、「loza」は「磁土」あるいは「陶磁器」の意味としている (Real Academia Española, Diccionario de la lengua castellana (Madrid: Real Academia Española, 1734), pp. 433~1, 433~2 参照)。当時の東アジアの海外貿易の商品の種類から言えば、lossa と losa はともに loza である可能性があり、全て陶磁器である。ただし、バラスト用の「タイル」の可能性もある。しかし、1686年4月7、8日と同年5月18日に中国からマニラに向かう船は全て「磁器の碗 (escudillas de lossa)、磁器の皿 (platos de lossa) と磁器の碗 (tazas de lossa)」を積んでいる (AGI, Filipinas, 64, vol. 1, folios 449v-451r, 463v-465r, 467r-468v. を参照)。この場合の lossa は明らかに loza である。Losa については、第二本のマニラ税関文書に1685年に船長 Quenqua、Tençia、Muecua 及び Senqua が担当した中国船は、「磁器の茶碗 (escudillas para caldo de losa)、中型の磁器の皿 (platos mediano) 普通サイズの広皿 (platos ordinarios de losa basta) 及び中型の磁器の皿 (platos medianos de losa azules)」を運んでいる (AGI, Filipinas, 64, vol. 2, folios 188r-190v, 199r-203r, 205v-209r, 218v-220v. を参照)。そのため、losa も陶磁器の一種である。1665年から1681年までの間にフィリピンには約21回、輸入されており、その中でも1670年が最も多い。

台湾船がフィリピンに輸出した lossa/losa/loza の到着日一覧

1665/4/18	1668/3/24	1670/4/1	1670/4/14	1672/4/28	1673/6/5	1675/3/10
1666/3/15	1668/4/5	1670/4/1	1672/3/16	1673/5/27	1674/5/4	1676/4/18
1667/3/28	1670/3/29	1670/4/3	1672/4/19	1673/5/29	1674/5/22	1681/2/3

(資料出典: AGI, Filipinas, 64, vol. 1, folios 172v-173r, 185v-186v, 192v-193v, 197v-198v, 199r-200v, 209v-210v, 211r-212v, 214v-215v, 216r-217v, 218r-200r, 225r-226r, 226v-227v, 228r-229r, 240v-241v, 242r-243r, 243v-244v, 246v-248r, 251v-253r, 256r-257v, 265v-266v, 325v-326v.)

- 24 hilo de alcarreto。hilo de acarreto と記載されている。これは細い麻縄の糸 (紐) である。その用途は漁獲用の網で、1686年3月29日に入港した中国船の文書から分かる。この船には「130枚の細い麻縄紐でできた漁網 (çiento y treinta y çinco redes de pescar de hilo de acarreto)」と記載されている (AGI, Filipinas, 64, vol. 1, folios.479r-481r. を参照)。
- 25 原文のスペイン語は「象」と直訳されるが、文献を見ると決して動物の象を指すのではないことがわかり、古文書では elefante も marfil (象牙) と書いている。しかし、ここには別の意味がある。E. H. Blair と J. A. Robertson は、「elephant」は麻布のブランドの種類と解釈している (E. H. Blair & J. A. Robertson, The Philippine Islands, vol.44, p.267. を参照)。そのため、象という商標名の麻布である。

ている。1679年から1684年までの商品については全て値段がわからない。鉄と麦は数量の記載はあるが、価格の記載はない。麻縄と白糸も数量の記載はあるが、価格の記載はほとんどない。carahayes、陶磁器、紙、タバコの多くは輸入日の記載のみである。他に付随した小さな商品は数量のみか、品名だけが記されている。

当時の通用貨幣はペソ (peso) とリアル (real) の2つの単位が主流である。リアルは、1497年にスペインのカトリック両王フェルナンド (Fernando) とイサベル (Isabel) が在位した時に铸造され、スペインの統一通貨となった。これまで約百年の間に使用されていたのは、国王アルフォンソ8世 (Alfonso VIII) が推進してきた「maravedís」である。この通貨も文献に登場し、主に船舶の係留に必要な税金を徴収するために使われている。しかし、文献上、ペソやリアルと書かれているのは、当時、盛んに使われていた「ocho real」であり、これは「reales de a ocho」あるいは「メキシコペソ (pesomexicano)」とも呼ばれていた³¹。実際に、1572年から「ocho real」、「reales de a ocho」や「メキシコペソ」はすでに国際市場に広まり、スペイン、アカプルコから極東地域まで広く見られる。このようなメキシコの貨幣の使用は17世紀の中ごろに最高潮に達する。アジア地域では、ペソと

- 26 Choca は18世紀のスペイン語辞典によれば「飼料、肥料」の意味がある (Real Academia Española, Diccionario de la lengua castellana por la Real Academia Española (Madrid: Real Academia Española, 1780), p. 224~2. を参照)。第二本の税関文書の中に1686年3月28日の文書があり、その内容は、「Gea は6 taes (1 tae 約10里耳) 12granos (1 里耳約12granos) 銀貨の chocca seca を買う」と記されている (AGI, Filipinas, 64, vol. 2, folio. 355r. を参照)。しかし、文中からは、choca は一体何であるか読み取れない。そのため、訳名は原文のままとしておき、今後の研究の進展を待ちたい。
- 27 18世紀のスペイン語辞典には chita という言葉があり、羊や牛などの足の骨部分を意味し、子供の遊びに使われている (Real Academia Española, Diccionario de la lengua castellana por la Real Academia Española (Madrid: Real Academia Española, 1729), p. 326~2 & 1780年出版, p. 224~1. を参照)。しかし、17世紀の東アジアの海外貿易商品の中の chita には、他の意味があるかもしれない。当時のスペイン人はポルトガル人の影響を受けて chita の言葉を使ったのかもしれない。この言葉はインド語 chint に由来するもので、木綿更紗を指している (Henry Yule, Hobson-Jobson: A Glossary of Colloquial Anglo-Indian Words and Phrases, and of Kindred Terms, Etymological, Historical, Geographical and Discursive (London: J. Murray, 1903), p.201; Sebastião Rodolfo Dalgado, Glossário Luso-Asiático, vol. I (Coimbra: Imprensa da Universidade, 1919), p.276. を参照)。
- 28 1681年3月28日に入港した船が2箱積んでいる (AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 328r-329r. を参照)。Heda は zeda の誤記、つまり「絹」の意味である。
- 29 1681年5月10日に入港した船が小箱3つ積んでおり、一つの小箱には100段入っている (AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 329v-330r. を参照)。1685年12月14日アモイからマニラに行く中国船の登録書類によると、「rengues は nipiz に使うもの」ということが分かる (AGI, Filipinas, 64, vol. 1, folio. 584v. を参照)。nipiz は蕉麻布で、rengues は nipiz に近い性質を持っているが、品質は nipiz に比べて優れている。その価格はシルクに匹敵し、繊細な蕉麻布であった。
- 30 1683年4月11日入港した船は中国の棕櫚扇子2箱を載せている (AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 388r-389r. を参照)。
- 31 この場合のペソはメキシコペソを指しており、1ペソは8リアルに相当した。

リアルはガレオン船によって太平洋貿易ルートを経由して輸入された。早くも16世紀末、中国南部はマニラとの間で茶や絹などの商品の取引が行われているので、中国南部ではメキシコペソがかなり普遍的に使用されていた。台湾船が積載している商品の表示価格は全てリアルやペソが単位である。このことから、この通貨の当時の流通とその重要性について改めて確かなものとして知ることができる。

以下は各商品を数量、価格によって一つ一つ分析し、図と表を添付して参考にする。

1. Mantas (布) : (付録表 3)

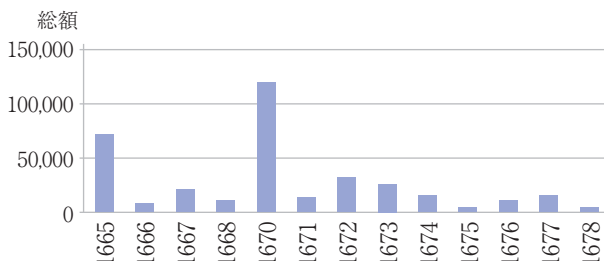
Mantas (布) はすべての貿易商品の中で最大の輸出量で、毎年のように布がマニラに輸出されており、その数量は驚くべきものがある。1668年3月24日、同年4月5日と1670年2月19日に入港した船のように総額が3万リアルを超える船もある。布のリストは1665年から1678年までは完全に揃っており、1679年から1684年までは価格が全く示されていない。布の価格は高くなく、1件あたり4リアルから18リアルまでばらつきがある。一般には8リアルを維持している。日本布の価格はあまり高くなく、コーチシナ布のみ価格が高く、14~18リアルで取引されている。輸出総額が最も高い年は1670年である (図1 参照)。

布の種類は多く、日本布、安海布、「Ysines/Insines/Inçines/Ynzines」布、Lanquin 布、コーチシナ布、Lamio 布³²、Cangan 布、Tanua 布³³、Quinolayes 布³⁴、中国布や広東布など産地と材質は様々である。未加工の生地布 (mantas crudas) もあれば、加工された布

年代	総額	年代	総額
1665	72,720	1673	26,400
1666	8,240	1674	15,680
1667	21,200	1675	4,670
1668	11,010	1676	10,640
1670	121,540	1677	15,500
1671	13,620	1678	4,640
1672	32,560		

(数値は付録表 3 より)

図1 台湾からフィリピンへ輸出された mantas (布) の総額の推移



(資料の出典は左表を参照のこと。1670年3月29日の5包の Insines 布は、単価10リアルで算出している。1678年以降は価格が表示されていないので、このグラフには含めていない。)

32 1668年2月9日に20包の Lamio 素地布を輸入している。1包には35枚入っており、一枚当たり12リアルである (AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 196r-197r. を参照)。発音から推測すると Lamio は南澳かもしれない。

もある。布そのものについては、非常に詳細に説明をつけている資料もある。そのうち、藍色が多く、白色、縞模様、黒色、狭いもの、厚手のもの、taficiras³⁵のものなどは少ない。長さまで記されているものもある。長さはそれぞれ14、12、11、10、8～9や6～7 varas³⁶とある。

布の原産地を見ると、ほとんどが日本から来ている。江戸前期(17世紀中頃から末期頃)には日本の綿花の栽培が普及し、生産量も多くなる。綿製品は他の地域にも輸出されている。1671年9月5日、元々は日本から台湾に向かった船が遭難してマニラに到着しており、その船には33包の幅広綿 (algodón vasto)³⁷が載せられていた。次いで福建の南東沿岸の安海 (Anhai/Anhay) の布であり、コーチシナ布も一定量ある。最も少ないのは中国と広東の布である。また、Insines 布と Lanquin 布も少なくない。Lanquin 布は布地の種類の一つであり、1668年2月9日の船の資料を見ると、2束の sayasayas de Lanquin をマニラに輸出したとある他、他にも確認することができる³⁸。Lanquin は、楊彦傑が『荷据時代台湾史』に列記する台湾から東京や広南に輸出した商品の「Lanckin」にあたる可能性がある。原文を列記しているだけで、考証はされていない³⁹。発音から考えると、Lanquin 布は南京綿布を指しているのかもしれない。

特に注目したいのは、1670年2月19日、1672年4月19日と同年4月28日に運送された商品の中には全て「cangan」の布があることである。前者は5包を輸入して、後二者はそれぞれ4包を輸入している。1包あたり60件あるいは80件あり、1件あたりの価格は1ペソあるいは9リアルである⁴⁰。陳国棟が2000年10月に発表した「17世紀初期の東アジア貿易における中国綿布－Cangan と台湾」によると、「cangan」は粗い綿布の一つであり、台湾に販売された cangan 布は中国製かもしれないと指摘した⁴¹。

33 1673年5月27日に Tanua 布を4包輸入している。1件の長さは11varas、1包あたり60件あり、1件あたり1ペソの価格である (AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 240v-241r. を参照)。文字の音を考えると、Tanua は同安である可能性がある。明朝の王世懋の『閩部疏』には、同安では綿が栽培されており、布製品を織ることができることが記されている。

34 1683年4月11日に8つの小包の Quinolayes の藍色の布を輸入している。1小包あたり20枚入っている (AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 388r-389r. を参照)。

35 「taficira」とは、ポルトガル語 tafecira や tafacira のことで、アラビア語 tafsilah に由来する。絹織物、綿製など様々な種類のアジアの布地を指している。縞模様の織物の種類である (Sebastião Rodolfo Dalgado, *Glossário Luso-Asiático*, vol. II, p.336 を参照)。ここでは綿製に対応している。

36 vara は bara と書く。1 vara = 835.9mm。

37 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 223v-224v。

38 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 196r-196v。

39 楊彦傑『荷据時代台湾史』(台北:聯経、2000)、125ページ。

40 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 205v-206v, 226v-227r, 228r-228v。

2. 太物：(付録表 4)

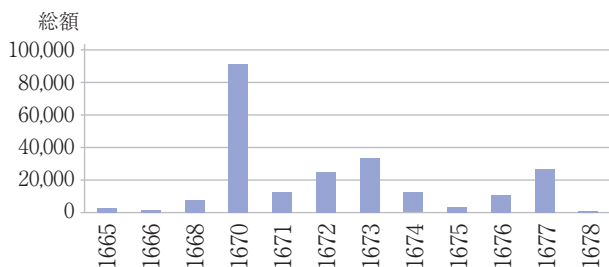
太物、特に麻布は mantas (布) の次に多い第二の輸出品である。未加工の麻布と加工済のものがあり、産地も品質もさまざまである。種類も多い。例えば、安海麻、Taupac 麻、Inzon/Inson/Ynson 麻⁴²、Bancha 麻⁴³、Cacui 麻⁴⁴などがある。フィリピンの現地人は麻製の衣類を多用する。その価格は布と大差なく、1枚あたり4~16レアルの間で、一般的な価格は12レアルである。ただし、1668年3月24日の Inzon 麻だけは価格が不思議なほど高く、3ペソ、すなわち24リアル値がついている。事実、すべての麻布の中で Inzon 麻の価格が最も高く、量も最も多く輸入されている。次いで輸入されたのは Taupac 麻と安海麻であった。Mantas (布) と同じく、麻布も1678年以降については価格の記載が全くなく、輸出総額が最も高い年は1670年である(図2を参照)。すべての記録文書の中で、1672年4月28日に輸入した3包の藍麻だけが内張り用のものと特別に明記されているが⁴⁵、他は全てその実際の用途が記されていない。

Elefante (象という商標名を持つ麻布) の価格は良く、一件あたり6ペソあるいは4ペソである。ただし、1668年4月28日に筵で包まれた6包の elefante を輸入しているが、そ

年代	総額	年代	総額
1665	2,560	1673	34,040
1666	1,440	1674	12,480
1668	7,920	1675	3,360
1670	92,940	1676	10,640
1671	12,600	1677	27,200
1672	25,160	1678	960

(数値は付録表4より)

図2 台湾からフィリピンに輸出された綿麻布の総額推移 (1665-1678)



(資料の出典は左表を参照。1688年4月5日の2包の安海素麻の単価は14レアルで算出している。1678年以降は価格が表示されていないので、この表には含まない。)

41 陳国棟が2000年10月27日に発表した「十七世紀初頭の東アジア貿易における中国綿布-Canganと台湾」(近代初期の東アジア海洋史と台湾島史-曹永和院士80大寿国際学術シンポジウム) pp. 1-19を参照。

42 発音によると Inzon/Inson/Ynson は永春である可能性がある。清の杜昌丁の『永春州志』には、当時の永春の産物は黄麻布と青麻布であり、織布はかなり有名である。

43 1670年2月19日に10包の Bancha 白麻を輸入して、各パックに70枚がある、一枚当たり1ペソ。(AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 205v-207r. を参照)。発音によると Bancha は北鎮の可能性もある。明代後期の福建惠安の北鎮の苧麻布はとて有名で、福建浙江地区で販売されている良品の一つであった。

44 1670年4月3日に4包の Cacui 麻を輸入している。1包に80枚入っており、1枚当たり1ペソの価格である (AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 216r-217v. を参照)。

45 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 228r-228v.

れは一件当たり 9 ペソ⁴⁶の価格である。その他、1681年 1月 8日、同年 2月 3日と 5月 10日及び1683年 4月 11日の船などが輸入した少量の商品の中に筵が見られる（付録表10）。

布類の価格において、Inzon 麻に匹敵するものが沙藍布（sarampures）⁴⁷である。沙藍布の輸入は1672年と1673年に見られるが、この綿布はイギリス人の手によって転売されたものかもしれない⁴⁸。注目すべきは、1674年 5月 4日に 3包の狭い candaqui の輸入があり、1件の長さは約 6 varas で、各包には100件入っており、1件あたり 4 レアルである⁴⁹。また、1675年 3月 10日には 3包のインドの黒い細綿布（caniquies negros）を輸入しており、1件の長さは約 6.5varas で、各包には120件入っており、値段は 4 レアルである⁵⁰。これらの布の価格はどれもかなり安い。

3. 生糸：（付録表 5）

1665年から1682年まで（1667年・1669年・1675年・1676年・1678年及び1680年を除いて）、毎年のように生糸がマニラに輸出されている。その総輸出額が最も大きな年は1670年である（図 3 を参照）。基本的には台湾からマニラに輸出される生糸は 1年 で 2箱程度の輸出量を維持しているが、数量は多くない。1箱あたりの重量は 1 ピクル（pico）であり⁵¹、その他、1包あたりの重量は 40・50・60・70・80斤（cate）などさまざまである。その中

46 台湾船がフィリピンに輸出した elefante 数量価格表

到達年月日	elefante（包数）	1包あたりの件数	単価（ペソ）	総額（ペソ）
1668/4/28	6（筵に包まれている）	10	9	540
1670/2/19	2	20	6	240
1673/6/5	3	20	4	240
1674/5/4	5	20	4	400

（資料の出典は AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 201r-201v, 205v-207v, 243v-244r, 246v-247v.）

47 1672年 3月 16日に入港した船は 3包の沙藍布を運んでいる。1包に 35枚入っており、1枚 3ペソである。1673年 1月 19日に全部で 6口輸入している。その内の 3箱については、1枚の長さは約 16varas、1箱には 40枚が入っており、1枚の値段は 2ペソである。残りの 3包には 60枚が入っており、1枚の値段は 12レアルである（AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 225r-226r, 236v-237v. を参照）。

48 周学普（訳）『17世紀台湾イギリス貿易史料』、7、26、33ページ。頼永祥「台湾鄭氏とイギリスの通商関係史」『台湾文献』16：2（1965）、24、26、27ページ。これらの中に、鄭氏がイギリス人に携行を依頼した商品やイギリス人が贈答用としたとみられる上等な綿布沙藍布（sallampore/salampore）が記されている。

49 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 246v-247v. 「candaqui」は布地の一種であり、caniquí の誤字かもしれない。

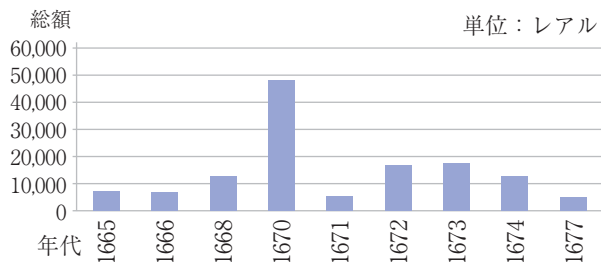
50 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 256r-257r. 単数 caniquí、複数 caniquies, caniquí/canique. ポルトガル語 canequim に由来する。語源はインドの *khanki* であり、インド綿布の一種類を指す（Real Academia de Española, Diccionario de la Lengua Española, tomo I（Madrid: Espasa-Calpe, 1992）、p. 388. を参照）。

51 pico は重量の単位で、約 100斤（cates）、つまりイギリス人が言う Pecul や Picul で、閩南語の漢字は「担」。

年代	総額	年代	総額
1665	7,200	1672	17,200
1666	7,040	1673	17,920
1668	13,120	1674	12,960
1670	48,800	1677	5,120
1671	5,600		

(数値は付録表5より)

図3 台湾からフィリピンへ輸出された生糸の総額の推移 (1665-1677)



(資料の出典は左表を参照のこと。1677年以後の物品価格が表示されていないので、このグラフには含めていない。)

で80斤の例が最も多い。生糸はすべての商品の中で最も高価で、その価格は一律ではない。1ピクルあたり300ペソ、350ペソ、400ペソ、450ペソや500ペソの値がつけられている。付録表5から分かるように、生糸価格の変動は鄭經政権の前期においては品質の優劣と相関しているが、鄭經後期と鄭克爽の時代は情勢不安定のため、生糸の製造品質が次第に悪くなり、そのため価格も高くない。当時のペソとリアルの価格換算から、1ペソ=8リアルとした場合、生糸1斤の価格を知ることは難しくない。一般に生糸1斤の価格はおおよそ32リアル前後、1668年2月9日に輸入された生糸⁵²のように良品質の生糸は40リアルものの価格で販売されている。黄色生糸の価格は高くなく、約24リアルである。1681年5月10日に輸入された絹糸は価格の表示はないが、品質の悪い白絹糸と粗製の絹糸と記述されており、品質の悪い絹糸と生糸以外に同じ舳舩が3包の絹布 (chaules) を運んでいる。各小箱には40斤ずつ収められている⁵³。生糸の産地は記録されてない。鄭氏と中国沿海の私貿易は限られていたが、中国が唯一の生糸の主要産国であるため、私貿易品の多くは中国の生糸であると容易に判断することができる。実際にマニラに輸入された生糸の量はかなり限られており、主な生糸はいずれも日本に運ばれている。このような高価な奢侈品を消費できたのは現地のスペイン支配層と裕福な中国商人だけであった。

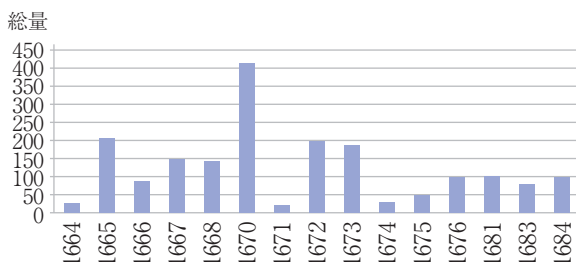
52 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 196r-197r.

53 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 329v-330r. 単数 chaúl、複数 chaules。Chaúl ももとはインド西岸の港の名前で、この港から輸出されたということから、軽く薄い絹織物の名称となっている。日本語の翻訳は「茶宇 (茶宇縞)」。(陳国棟、『運送と輸出：荷据時代の貿易と産業』を参照、『台湾の山海経験』(台北：遠流、2005)を収載し、ページ408。)明らかに日本語訳は発音によって漢字が当てられているが、Chaúl は古スペイン語辞典では中国シルクの布の意味がある (Real Academia de Española, Diccionario de la Lengua Española, tomo I, p. 641. を参照)。

年代	総額	年代	総額
1664	26	1673	190
1665	210	1674	30
1666	90	1675	50
1667	150	1676	100
1668	145	1681	104
1670	420	1683	80
1671	20	1684	100
1672	200		

(数値は付録表6より)

図4 台湾からフィリピンへ輸出された鉄の総量の推移 (1664-1684)



(資料の出典は左表を参照のこと。)

4. 金属類：(付録表6)

台湾からフィリピンに輸出された金属は鉄、銅、鉛があり、その内、鉄が主要な輸出品品であった。銅や鉛の輸入は珍しく、かつ1681年と1682年に集中している。銅の価格については1674年5月22日に入港した船のみ記録がある。この船は銅20箱を輸入しており、1箱に90斤収められていて、1ピクルあたりの値段は14ペソである⁵⁴。銅は主に日本からもたらされたものであり、統計によると、日本の銅の輸出量の約70%は台湾、東京、シヤムなどに輸出されていた。台湾の日本の銅に対する需要の多くは銭の鑄造と武器の製造によるものであった。さらにアジア諸国の銅の生産量が少なく、貨幣を鑄造するための銅の需要が大きいことも理由の一つであった。それによって鄭氏は転売の利益を得られたのである⁵⁵。このため鄭氏は銅に対して管理措置を取って、他に輸出することを禁止している。銀も日本から台湾に輸入されたものである。当時の日本銀の輸出は世界の銀生産量の3分の1に達している⁵⁶。しかし、フィリピン自身は中南米から銀が大量に流入していたので、銀の需要はなかった。金属類の輸出は大半が鉄で、粗鉄と純鉄に分けられ、形状は棹と釘がある。この20年間に入港した船の中では、1674年5月22日、1681年1月8日と同年2月3日、1682年2月18日と同年4月15日の船が鉄を積んでいなかったことを除いて、ほぼ毎

54 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 252r-253r.

55 朱徳蘭『清初遷界令時明鄭商船の研究』。(史聯雜誌) 7 (1985年12月)、37ページ。実際に1671、1683、1684年に日本を発って台湾に向かった5隻の船は全て銅を積載していた。1671年9月5日に停泊した船は、20箱の粗製銅を運んでいる。1683年1月11日の船は50箱の銅を運んでいる。同年の1月27日には20箱運ばれている。1684年2月16日に停泊した船は5箱の銅を運び、同年2月16日には100箱運ばれている (AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 223v-224r, 385r-386r, 386v-387r, 438r-439r, 439v-440r. を参照)。

56 林明德、『日本中世近世史』(台北：三民、2000)、156ページ；依田喜家、『日本通史』(台北：揚智、1995)、149ページ。

年、鉄がマニラに輸出されている。輸出総量が最も大きな年は1670年である（図4）。船の一艘あたりの鉄の輸出量は一般に50ピクルで、多いもので100ピクルである。ただし、1668年4月5日の輸出量は5ピクルしかない。

鉄はほとんど日本から来ており、台湾に運んでからフィリピンに転売している。ただし、極少数の粗鉄は中国大陸から台湾に運んでフィリピンに転売されている⁵⁷。鉄は船体を建造するために使われ、多くは上記の両地から運ばれてきたものであるが、良質の鉄はアメリカ大陸のヌエバ・エスパーニャ（メキシコ）からもたらされていた⁵⁸。

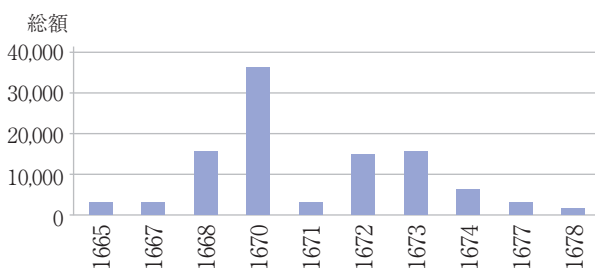
5. sayasayas（紗綾）、小曳網紐、麻縄紐と白糸：（付録表7、表8）

sayasayas は奢侈品であり、当地のスペイン人と裕福な華人が使用するために供給されたとみられ、その輸出量は多くない。1隻あたり2梱は輸出され続けていた。その年間総輸出額が最も高い年は1670年である（図5参照）。sayasayas の1件の価格は15レアルから36レアルの間である。一般的な価格は20レアルで、高いもので4.5ペソ、すなわち36レアルである。用途は女兒用と記載のある文献もある⁵⁹。1668年2月9日には2梱の sayasayas de Lanquin（南京紗綾）を輸入しており、1682年と1683年の3隻の船は全て白色の sayasayas を積載していた⁶⁰。小曳網紐は輸入回数こそ多いが、数量は多くなく、価格もかなり安い。1670年4月1日と同年4月14日の価格の12レアルを除いて、一斤当たり2～3レアルの価格を維持している⁶¹。一般的には1包に1ピクル（即ち100斤）の小曳網紐

年代	総額	年代	総額
1665	3,200	1672	15,200
1667	3,200	1673	16,000
1668	15,840	1674	6,400
1670	36,800	1677	3,200
1671	3,200	1678	1,500

（数値は付録表7より）

図5 台湾からフィリピンへ輸出された sayasayas の総額の推移（1665-1678）



（資料の出典は左表を参照のこと。1678年以後の物品価格が表示されていないので、このグラフには含めていない。）

57 1676年1月15日と同年4月18日に輸入されたのは中国の粗製鉄。（AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 259v-260v, 265v-266v. を参照）

58 何曉東、『フィリピンの古近代史』（台北：三民、1976）、34ページ。

59 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 211r-212v, 218r-220r.

60 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 337v-338r, 388r-388v, 389v-390v.

61 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 211r-212v, 218r-220r.

が入っている。麻縄紐の輸入時期はちょうど小曳網紐で輸入されていない時期にあたる。主に1678年4月5日、1681年3月28日から1684年1月31日の間である。輸入量はピクル単位で、最も量が多いのは1681年3月28日の20ピクルである。その単価は列記されておらず、わずかに1678年4月5日のみ1ピクルあたり26ペソの価格が記載されている⁶²。白糸は主に裁縫用で、1667年3月28日に2包を輸入し、1681年3月28日と1684年1月31日にそれぞれ1包を輸入している⁶³。1667年3月28日の記録から、白糸1斤の価格が1ペソであることが分かる⁶⁴。

6. 麦：

フィリピンの主要な食糧作物は米である。パンを主食とする習慣があるスペイン人にとっては、ヌエバ・エスパニーヤや中国から麦を輸入するしかない。記録は麦の重量が中国の重量に従って包装されていることを示している⁶⁵。実際には台湾は中国大陸から麦を輸入するほか、日本からも輸入している⁶⁶。1664年5月6日の船の文書には、台湾にはもともと麦の商品がなく、この地では果実が多く産し、麦は Manaos のオランダ人によって台湾に転売され、その後、台湾の商船を経由してマニラに販売されていると特に指摘されている⁶⁷。今のアマゾン川流域のブラジルに Manaos と呼ばれる都市があり、17世紀のブラジルはオランダ人と深い繋がりがあり、植民地を設けたこともある。しかし、ブラジルにいるオランダ人が麦をアジアに転売する必要がなく、この場合の Manaos はアジアのどこかを指しているのかもしれない。フィリピンに駐在するスペイン政府 Diego de Salcedo は、その執政時代（1663-1668）に麦の栽培の奨励を試みた。一つの成功例としてはパンパンガ州（Pampanga）の市長が、現地の先住民に麦栽培を教えた結果、麦の輸入価格が下がったことが挙げられる⁶⁸。図6によると、Diego de Salcedo 執政初期におけるフィリピンのスペイン人の麦の需要量が多く、1670年の輸出量も多い。そして、最も多かった年

62 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 293v-294r.

63 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 192v-193v, 328r-328v, 435v-436v.

64 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 192v-193v.

65 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folio 436v.

66 1684年2月7日に中国大陸から台湾への船が45ピクルの麦を運んでいる。同年2月16日に日本から台湾までの船は60ピクルの麦を載せている（AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 437r-437v, 438r-439r. を参照）。

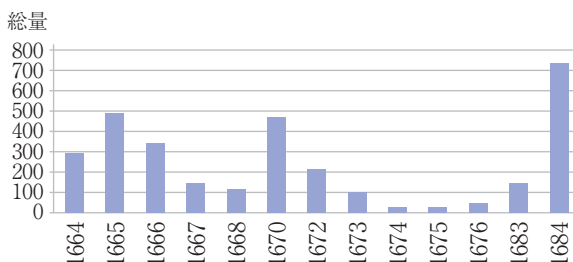
67 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 158r-158v.

68 Inmaculada Alva Rodríguez, 「La centuria desconinida: El siglo XVII」 Historia General de Filipinas (Madrid: Ediciones de Cultura Hispánica, 2000), p. 234に掲載。

年代	総量	年代	総量
1664	300	1673	105
1665	500	1674	30
1666	350	1675	30
1667	150	1676	50
1668	120	1663	148
1670	480	1684	750
1672	220		

(数値は付録表9より)

図6 台湾からフィリピンへ輸出された麦の総量の推移 (1664-1684)



(資料の出典は左表を参照のこと。)

が1684年であることもわかる。船毎の輸出货量を見ると、1664年から1666年までと1684年が多く、200ピクルから300ピクルまでの量があり、中には650ピクルの輸出もある。ただし、1673年5月27日の船のみ、台湾から5ピクルしか麦を輸出していない。1674年に三藩の乱が発生した後は、麦の輸出も少ない(付録表9)。この時期の鄭氏はちょうど戦乱に臨んでおり、戦時の食糧作物は非常に重要であり、米を主食とする台湾でさえ、1674年3月1日の船の文書が示すように時には外からの援助を頼りにしなければならなかった。

7. 紙とタバコ：

紙の輸入も1670年が最も多く、産地については1682年2月18日に1ピクルの中国の普通紙が輸入されたと言及されているだけであり、それには一緒に2ピクルの粗製紙も積載されていた。また、1683年4月11日にも詳しく記載されており、20梱の粗製紙が運び込まれている⁶⁹。この20年間にタバコの輸入は9回ほどあり、中には5隻の船が登録された時、中国からのタバコの資料も添えられていた。輸入量については、1683年4月11日の船が5小桶を載せていることが言及されており、1桶には60張(papeles)入っていた。そして、1684年1月3日には20小桶を輸入している⁷⁰。スペイン人はガレオン船でタバコをフィリ

69 台湾船がフィリピンに紙を輸入した年月日表

1670/3/29	1670/4/1	1670/4/14	1681/1/8	1682/2/18 (2ピクル粗製紙, 1ピクル普通中国紙)
1670/4/1	1670/4/3	1676/4/18	1681/2/3	1683/4/11 (20梱の粗製紙)

(資料の出典は AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 209v-210v, 211r-212v, 214v-215v, 216r-217v, 218r-220r, 265v-266v, 324r-325r, 325v-326v, 330v-332r, 388r-389r.)

70 台湾船がフィリピンにタバコを輸入した年月日表

1666/4/2	1668/3/24	1670/4/1 (中国タバコ)	1670/4/14 (中国タバコ)	1684/1/31 (20小桶の中国タバコ)
1677/3/28 (中国タバコ)	1670/3/29	1670/4/3	1683/4/11 (5小桶の中国タバコ, 1小桶60張)	

(資料の出典は AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 187r-187v, 192v-193v, 197v-198v, 209v-210v, 214v-215v, 216r-217v, 218r-220r, 388r-389r, 435v-436v.)

ピンに送り、17世紀初めには福建商人がフィリピンのタバコを中国に持ち込んだ。文献によると、17世紀の中後葉には中国でタバコの栽培が広まり、商品作物となった。この二つの商品はいずれも主要な輸出品ではなく、付帯的な性質のものが多い。これらの登録されたほとんどの船に付帯的な雑貨が見られるが、これらの雑貨は全て総額で表わされている。多くは3000ペソ、2000ペソ、少ない場合は300ペソ、400ペソのものもある（付録表10）。

8. 胡椒：

胡椒の主要産地は東南アジアである。税関記録によれば、1667年3月24日、1668年3月24日と同年4月28日に入港した商船だけで、それぞれ26桶（8ピクル積込）、50ピクル、140桶（100ピクル積込）の胡椒を積んでいる（下表）。また、1680年5月2日に入港した船は、商業貿易のために来たわけではないが、船には8ピクルの胡椒が載せられていた⁷¹。基本的にフィリピンにとっては近くの胡椒の産地との取引の方が台湾と取引するよりも便利で安いと、1ピクルあたり8.5～10ペソの価格を見ると、マニラへの胡椒の売値も安くないことがわかる。

入港年月日	胡椒（桶/ピクル）	1ピクルあたりの単価
1667/3/24	26/8ピクル	9ペソ
1668/3/24	50ピクル	10ペソ
1668/4/28	140/100ピクル	8.5ペソ

（資料の出典は AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 191v-192r, 197v-198v, 201r-201v）

9. その他の商品

その他の商品の品目はかなり多く、犁に用いる木棒などの木材類、砂糖、麵、日本酒、茶（cha）などの食品類、皿、碗、鍋などの器具類がある。そして、quila⁷²、中国靴、石

71 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 323r-324r.

72 スペイン語で quila とは南米産の竹（Real Academia Española, *Diccionario de la lengua castellana por la Real Academia Española* (Madrid: Real Academia Española, 1925), p. 1012～2. を参照)。ここでは別の意味がある。1685年4月16日、船長 Çequa が担当した舢舨で、アモイからマニラに到着した船に「300件の mantas (布)、一件 5 - 6 baras、190件は上記のように大きい quilat、70件は上記のように quilat...」(AGI, Filipinas, 64, vol. 2, folios. 246v-249v. を参照)が積載されていた。上記の quilat はある布地を指すが、quila と quilat は同じ言葉かもしれない。台湾に関するイギリス東インド会社のファイルに極めて類似した言葉-quilts がある。これはインドの織物で作った布団を包むための布地のことである (Chang Hsiu-Jung など編, *The English Factory in Taiwan, 1670-1685* (Taipei: National Taiwan University, 1995), p. 760.) を参照)。しかし、他に証明する資料がないため、訳名についてはまだ原文のまま保留している。

膏、犁、文具箱、choca、テーブルクロス、日本の小机、葛籠、chita（木綿更紗）などがある。これらの輸入商品は数量が列記されているものもある。quila は1681年3月28日に200個運送されており、1682年2月18日には2包（1包に30個）運ばれている⁷³。犁に用いる木棒は1684年3月4日に入港した船は1000本を運んでいた⁷⁴。

食品類の中で砂糖のマニラ向け輸出は極めて少ない。これは鄭成功がゼーランディア城を包囲していた時期、軍隊屯田制度を実行し、サトウキビを栽培していた多くの土地で稲を栽培し、対外貿易の主要製品の糖の生産を奨励しなかったことが関係している。鄭経政権時代になると、砂糖の生産量はオランダ統治時代より大幅に減少した上、鄭経の専売の貿易品となり、主に日本に輸出された。その他、鹿皮もまた鄭経の専売貿易品で、日本に輸出されている。これらの商品の種類からもわかるように、台湾では鄭氏時代の中継貿易の商品の輸出先と量は、以前のオランダ統治時代と比べてかなり違っている。鹿皮や砂糖のように元々の商品であった産物は、フィリピンにおいては極めて珍しいものとなった⁷⁵。

麦で作った麺、日本酒、日本の小机と葛籠は、1681年1月8日の入港船の書類だけに記載があり、その数量はそれぞれ5箱、20小箱、90個、葛籠18個（内、大きいサイズのもの2個、小さいサイズのもの2個）⁷⁶。茶はもともと重要な輸出品であり、1670年4月3日の付带的商品の中に記載が見られる⁷⁷。茶は17世紀の初めにヨーロッパに伝わってから、かつて流行した時にヨーロッパの上流階級層に愛飲された。しかし、当時のスペイン人にとってはただ一時的なもので、伝統的にスペイン人はコーヒーやワインの飲用を好んだため、茶の需要はあまり大きくなかった。

碗と皿の種類は、大きさ、用途、精緻かどうか、または日本産かどうかによって分類することができる。輸出された碗や皿の数量も数多く記載されている。1681年1月8日に輸入された商品の中に、1俵に30個ずつ入った160梱(俵)の精緻な皿、1俵に100個ずつ入った75俵の小碗がある⁷⁸。1683年4月11日の積荷には1俵に30枚ずつ入った60俵の精緻な皿がある⁷⁹。1682年4月15日の積荷には20俵の大碗がある⁸⁰。1684年1月31日の積荷には1桶

73 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 328r-328v, 330v-331v.

74 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 440v-441r.

75 1672年5月14日と1673年5月27日に入港した2隻の船のみ、付带的な商品の中に砂糖の輸入がある（AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 229r-230r, 240v-242r.を参照）。鹿皮については、全く記載されていない。

76 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 324r-325r.

77 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 216r-217v.

78 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 324r-324v.

79 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 388r-389r.

に50個ずつ入った10桶の碗がある⁸¹。1684年3月4日には1俵に20個ずつ入った100俵のスープ用の碗がある⁸²。また、付録表10の付帯的な商品の中には、1666年4月2日に輸入された日本の皿、1668年4月5日に輸入された皿、そして1672年4月19日に輸入された碗が見られる。鍋は1665年4月18日の船の書類の付帯の商品の一覧の中に記載されている⁸³。比較的特殊なものとして、1682年2月18日に入港した船が1000個のチョコレートカップを積んでいた⁸⁴。チョコレートとタバコはもともとスペイン人が中南米のインディオから伝えられ、さらにアジアに伝えたものである。チョコレートは当時ヨーロッパの貴族が愛用していた嗜好品で、一般の人には手に入らないものであったため、チョコレートを飲用するためのカップをマニラに運んできたのは、現地のスペイン人の需要に対して供給するためであったことが分かる。

靴は中国由来のものであり⁸⁵、主に現地の中国人が履くためのものである。石膏は1673年5月29日と同年6月5日に、付帯的な商品としてマニラに輸入されている⁸⁶。犁は1670年4月1日に付帯的な商品として輸入されている。ただし、1683年4月11日には50対の数量、フィリピンに輸出されている⁸⁷。文具箱の輸入日については付録表10の付帯の商品の中に記されており、1666年3月15日と同年4月2日の舢舨であることがわかる。1676年1月15日には、赤色の幅広の食卓布が2包、輸入されている。1包には100件ずつ入っており、一件あたり1ペソである。そして、1682年2月18日には200件、掲載されている⁸⁸。その他のごくわずかな商品としては choca と chita (木綿更紗) があり、いずれも一回だけ輸入している。choca は1681年1月8日に90梱、輸入されている⁸⁹。ただし、1671年9月5日と1683年1月27日に元々日本から台湾に行く2隻の船も choca を運んでおり、特に後者の船は30ピクルの乾 choca を運んでいる⁹⁰。これらの記録から、この商品は台湾現地の産物ではなく、日本が主要な供給元とみなすべきことがわかる。chita (木綿更紗) は

80 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 337v-338v.

81 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 435v-436v.

82 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 440v-441v.

83 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 172v-173r.

84 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 330v-332r.

85 1667年3月28日に入港した船は中国の靴の数を記載していないが、1683年4月11日には中国の靴2桶を運んでいる (AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 192v-193v, 388r-389r. を参照)。

86 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 242r-243r, 243v-244v.

87 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 214v-215v, 388r-389r.

88 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 259v-260r, 330v-332r.

89 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 324r-325r.

90 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 223v-224v, 386v-387v.

1682年2月18日に入港した船のみ、2つの小包を積んでいた。1包に250枚入れて、マニラ湾に入っている⁹¹。

実際、上記の商品の輸入日付と取引額を見ると、通商が最も頻繁な年は1670年であり、その年は貿易量も最も多く、mantas (布)、麻、生糸、鉄、sayasayas、小曳網紐、紙、タバコ、陶磁器の輸出量もこの年が最高である。1670年が通商回数が最も多い年である理由については、イギリス史料に、鄭経による強い推進があり、各国に台湾における貿易を呼び掛けたとあることと密接な関係がある。商品の種類と数量について言えば、明らかに1681年は台湾商品の輸出種類の転換期というだけでなく、取引量の減少の時期でもある。この年以前、輸出された主要な綿布と麻布の数量は、そのほとんどが1681年に比べて多い。金属については、この年から鉄の輸出は銅と鉛に取って代られ、小曳網紐も麻縄と白糸に取って代られている。その他、quila、犁に用いる木棒、麵、日本酒、日本の小机、葛籠、碗、chita (木綿更紗) などのごく少量の商品は、この年からフィリピンに輸入されている。即ち1681年から台湾からマニラへの輸出商品は大きく変化した。貿易額の多寡や種類に関わらず、いずれも以前より貿易量が少なくなり、商品の内容もかなり多様化した。この年は鄭経が敗退して台湾に戻って間もなく、台湾の対外貿易は大きな変化が生じた。特に対日貿易の減少によって、商品の中継貿易の縮小をもたらしたのである。

4 1664-1684年の台湾国際貿易ネットワークの変化

台湾は東アジアの中心に位置し、西に進めば中国大陸、北へは琉球、日本、南はフィリピンに達する東西南北に往来する交通の要路を形成している。新航路が発見された後、ヨーロッパ人は相次いで商業貿易の拠点を探すために東洋にやってきた。中国は要求が高く、日本はまさに「鎖国時代」であったため、西洋人にとって商品の輸送地としての台湾の価値は一層増すこととなった。この重要性は鄭氏政権期になっても変らなかった。

マニラの税関記録や他の関連資料によって、鄭氏時代の海外貿易ルートを容易に描き出すことができる。当時の鄭氏の主な対外貿易国は日本であり、日本との貿易については「華夷変態」や他の関連研究成果を参考に詳細を知ることができる。

対日貿易量は政局の変動によって増減する。1661-1663年に鄭氏が中国沿海地方を攻撃

91 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 330v-332r.

していた時は、戦争の影響で日本に航行した商船はわずかに5隻のみであった。1664年から1673年までの休戦期間は東寧（台湾）から日本に行く通商の船の数は108隻に達し、年に平均11隻の商船が日本へ航行している。1674年には鄭経が三藩の乱に参加したため、1679年までは、政情不安定のため、商品不足となり、出航した船数は毎年約1隻にまで減少している。1680年に鄭経は軍需が欠乏し、軍勢が衰えて台湾に撤退し、1683年に鄭克塽が清に降伏するまでは、戦争で船を失い、多くの商船を軍船に充てたため、日本に渡る商船は年平均約8隻に減少している⁹²。朱徳蘭の『清初遷界令時明鄭商船の研究』には、1670年に台湾から日本に行く商船は11隻あり、1672年には16隻があるとの記載がある⁹³。1670年10月22日、イギリス人 Ellis Crisp が台湾から東インドバンテン支社に送った手紙によると、「台湾には大小の船舶が200隻ある。今年は18隻が日本に行く。その大半の所有者は国王である」⁹⁴。また、1672年11月16日、イギリスの台湾商船は「台湾王は5隻か6隻の船を持っている。毎年1月にマニラに行き、4月か5月に戻り、その後日本に行くのがだいたい6月か7月である。往々にして12、14、あるいはそれ以上の船が出かけて、11月か12月に戻ってくる。」⁹⁵と報告している。明らかにこの2つのデータには少し違いがある。もちろんこれは税関が実情を意図的に隠していることによるのかもしれない。マニラに向かった台湾船の数は、付録表1-1に詳しく記載されている。

以上のように、1670年と1672年のマニラ税関に示された年月日と商品から見ると、1672年に台湾からマニラに輸出された日本の商品の数量は、1670年の数量とは比較にならないほど小さく、イギリス人の史料の信頼性を支えている。鄭氏にとって、日本との貿易によって得た商品は重要な転売物資であり、このことは51隻の船の輸入品を見ても分かる。これらの商品の中で布と鉄はいずれも大口輸出品であり、鉄は日本からのものが3/4近くの数量を占め、布も1/3近くを占めている。1665年4月18日に入港した Tequa が責任をもつ舢舨の書類には最後に付带的な少量の商品について登録してあり、「この船は日本から大員に到った後、マニラ湾に行く」⁹⁶と示されている。つまり、この船はまず日本で貿易を行った後、台湾に帰ってからマニラに行く形態の三角貿易に従事している。1683年1月11日と同年1月27日、日本から台湾に行く2隻の船の中には、それぞれ500と150の日本

92 朱徳蘭、「清初遷界令時明鄭商船の研究」21-23ページ。

93 朱徳蘭、「清初遷界令時明鄭商船の研究」22ページ。

94 周学普訳、「17世紀台湾イギリス貿易史料」、27、55ページ。

95 周学普訳、「17世紀台湾イギリス貿易史料」、57-58ページ。

96 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 171r-172r.

の松の厚板が積まれている⁹⁷。イギリスの資料にも1679年11月5日の項に「台湾では木板や一切の生活必需品が不足するという前代未聞の現象が起きている。清人が嚴重に監視していることが原因で、一切の商品が輸入されていない」と述べられている⁹⁸。そして、1681年2月3日に入港した船の付帯的な商品の中の「盆と松木板」⁹⁹も台湾船が日本に行って貿易した後に、マニラに再輸出した商品と理解してよいであろう。他に少数の商品には、例えば銅のように日本由来のものもある。皿、小机、酒、松などのように、商品そのものに日本産であることが明記されているものもある。また、付録表2によると、1671年、1683年と1684年には日本から台湾に至った5隻の商船があり、多くの日本商品が運ばれている。例えば、銅、綿、釘、粗鉄、choca、松木厚板、松木、木棒、木箱、皿、碗、鍋、麦、小麦粉、鯛などがある¹⁰⁰。

対照的に、中国大陸側からの貿易量は時間とともに減少している。貿易品の中には生糸以外に、中国大陸からの輸出品が少量ある。例えば、麦、紙、煙草、靴などである。10隻の船の内、4隻は中国大陸から来た船であり、その商品は麦、紙以外に米¹⁰¹、碗、杯(坏)、茶などがある¹⁰²。上記の製品の中の麦と碗は中国だけの産物ではなく、日本もまた輸出している。中国の茶は主にフィリピンの中国商人の飲用のために供給されている。実際、中国との商業貿易は、海禁以前の貿易とは比較にならない。鄭氏政権期、清朝の経済封鎖によってアモイの私貿易の数量はかなり限られているが、1667年、1668年、1670年、1675年、1676年に清朝が不法な海上貿易に対する処罰法令を頻繁に公布していることを見ると、私貿易を行う者がまだ多い実態を物語っている¹⁰³。商品の輸入元から見ると台湾と安海との間の私貿易が頻繁に行われていることがわかり、布と麻は日本に次ぐ貿易額である。付録表3・4によると、1665年から三藩の乱発生前までは、安海布と麻の輸入はほとんど滞ることはなかったが、1674年以後は減少し、特に1678年から清朝が台湾を攻略するまでの間、安海布や麻はマニラに輸出されていない。これは鄭経が台湾経営に重心を置いた期間は、清朝の統治下であったアモイでの通商は困難なため、台湾はやむを得ず安海との貿易に転

97 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 385r-385v, 386v-387r.

98 周学普訳、「17世紀台湾イギリス貿易史料」、16ページ。

99 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 327r-327v.

100 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 223v-224v, 385r-386r, 386v-387v, 438r-439r, 439v-440r.

101 1677年3月20日、中国のアモイから台湾までの舢舨は世番への米であった。前年の台湾の農作物の不作が原因である (AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 277v-278r. を参照)。

102 AGI, Filipinas 64, vol. 1, folios 232v-233v, 302r-303r, 437r-438r.

103 朱徳蘭、「清代遷界令時明鄭商船の研究」20ページ。

向するが、三藩の乱の発生に伴い、鄭経は再度アモイに駐屯し、貿易の重点をまたアモイに戻したと説明できる。

鄭経、鄭克塽の時期に台湾も交趾支那、シャム、東京などの東南アジア地域と商業貿易を維持していた。『台湾外記』では、「旭は商船を各港に派遣して、造船材料を買うために多くの金を使い、台湾まで積載して、洋船、鳥船を造船する。そして、砂糖、鹿皮などを携えて、日本に販売し、銅棹、日本刀、甲冑を手に入れ、永曆銭を铸造する。それらをシャム、交趾支那、東京の各地に売って国は豊かとなった。これにより台湾は繁栄し、その社会経済は大陸に劣らないものとなった」¹⁰⁴。当時の商品の種類と価格から言えば、交趾支那布は台湾商人が転売したい商品の一つであった。しかし、政情の変化は、台湾の対日貿易の減少に影響を及ぼすだけでなく、東南アジアとの交易頻度にも影響を与えた。

東アジアの貿易圏では、鄭経はフィリピンのスペイン人を貿易対象と見ていたが、その他にオランダやイギリスもまた貿易対象として関心を持っていた。しかし、オランダ勢力は台湾から撤退した後も、捲土重来を忘れておらず、清朝と同盟を結んで鄭氏を排斥したため、台湾とオランダの間の貿易は大幅に減少した。台湾商人は食糧が足りない場合は、オランダ人と取引しており、例えば1664年5月6日に入港した船の文書にも記載されている。鄭経は新興勢力のイギリスを強く懐柔するが、イギリスとの貿易もかなり限られていた。鄭氏とイギリス東インド会社の貿易の詳細については、「17世紀台湾イギリス貿易史料」、頼永祥の「台湾鄭氏とイギリスの通商関係史」、曹永和の「イギリス東インド会社と台湾鄭氏政権」、楊佳瑜の「イギリス東インド会社史料からみた鄭氏來台後の国際貿易地位の変化（1670-1674）」などを参照することができる。

商品の産地自体を見ると、往復するマニラの中国商人によって台湾に輸出された商品もあるかもしれない。中国商人は5月と6月にマニラに到着した後、パリアンに居住したり、自分の商船でスペイン人と取引をしている。7月にスペイン人は中国商品をガレオン船でアカプルコに送った¹⁰⁵。もちろんその他のヨーロッパ人との貿易による可能性もある。

清朝の海禁政策、鄭氏と中国大陸との間の政情の変化は、台湾の対外貿易の減少に影響を与えた。51隻の船の文書にみられる商品の出帆地を見ると、鄭氏時代の台湾は一旦は安海を商業拠点としたが、その後またアモイに戻っている。鄭氏は中国商品の中継貿易者としての地位が低下したことにより、積極的に日本との通商に転向し、フィピン、交趾支

104 江日昇、台湾外記、237ページ。

105 Inmaculada Alva Rodríguez, "La centuria desconinida: El siglo XVII", p.236.

那など東南アジア地域との貿易を行った。さらに、フィリピンのスペイン人との貿易は、台湾からの再輸出商品を中南米市場に流入させた。

5 結論

鄭経と鄭克塽時代、台湾とフィリピンの間の貿易は絶えることなく続いており、マニラの重要性は依然として変わらず、スペイン帝国の漸次的な没落によってもその重要性が失われることはなかった。マニラの商業的な繁栄は、メキシコとマニラを往復する航路にガレオン船の頻繁な往来をひきつけただけでなく、マニラは東アジアとヨーロッパの商人が競って貿易を行うところにもなった。

中国の経済封鎖に直面している鄭氏にとって、台湾とフィリピンの貿易は苦境を打開するための方法の一つであった。そのため、鄭経は政権初期には積極的にフィリピンと交易を行い、特に1670年は最も頻繁で貿易量も最も多い年となり、この年は鄭経が各国を台湾との貿易に招請し、イギリスも書簡を受け取っている。本研究により中国大陆と台湾の貿易の中心地についてまとめることができた。三藩の乱以前は、鄭経は安海での貿易によって中国大陆の商品の運搬を行なった。そして、三藩の乱の間は、鄭経はアモイを占領し、アモイ貿易を利用するようになるが、安海での貿易もまだ続いていた。三藩の乱が平定されると、安海の貿易の地位は完全にアモイに取って代わられることになる。しかし、鄭経と中国の間の政情の不安定化は、対日貿易の縮小にそのままつながった。これは重要なことであり、当時の台湾にとって日本の商品は鄭氏一派と東南アジア貿易の主要な貿易商品であった。そのため、対日貿易の減少は東南アジア地域に対する貿易額も相対的に縮小させた。輸出量が減少しただけでなく、鄭氏政権時代の中継貿易の商品に大幅な調整をもたらせた。特に鄭経が敗退して台湾に撤退した1681年から鄭克塽が投降するまでの間、輸出商品の価格は表示されず、商品の種類は多様になり、貿易量も大きく縮小された。

鄭氏政権後期の台湾の対外貿易額は常に減少していた。この状況は清朝の台湾統治初期においても変わらなかった。1683年12月に康熙帝が中国沿岸部に中国人の再定住を許可するように命じ、特に1684年12月1日には沿海各省の海上貿易禁止令を全て廃止し、さらに1685年から清朝が一連の海上貿易を開放するに至った。海上貿易の全面開放によって長崎貿易及び東南アジア貿易を行う唐船（中国ジャンク船）の数は増え続けた¹⁰⁶。しかし、台湾の輸出貿易がようやく回復の兆しを見せるのは18世紀初頭になるまで待たなければなら

なかった。

本論文は「明鄭時代台湾とフィリピンの貿易関係—マニラ税関記録を中心に」（『台湾文献』54巻3期（2003年9月）、59-105ページ）を加筆修正したものである。

（訳者後記）

本論文は、マニラの税関記録をもとに、17世紀後半の台湾・マニラ間の貿易船の数や来航季節や回数のほか、具体的な商品、数量、価格を分析し、貿易の実態を実証的に明らかにしたものであり、東アジアの貿易研究における画期的な論文である。台湾・マニラ間の貿易だけでなく、アジアとアメリカの間のガレオン貿易の研究においても有益なものであり、マニラへ肥前磁器が運ばれていたことを史料において直接的に示した論文でもある。論文著者の方真真先生は、2003年に本論文を『台湾文献』に発表した後、さらに研究を進め、いくつかの論文や著書も出版している。いずれも学術的意義の大きなものであるが、今回、あえて最新の論文ではなく、本論文の翻訳を試みたのはやはり本論文が台湾・マニラ間の貿易研究における嚆矢的なものと考えたからである。そして、今回の翻訳について、方先生に打診したところ、改めて加筆修正した原稿をお送りくださった。深く感謝申し上げます。

翻訳作業は、まず賈が全ての文章について中国語（台湾語）から日本語への粗訳を行った。続いて二人で歴史的用語や当時の度量衡や通貨単位などを確認しながら最終的な文章へと仕上げていった。途中、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う大学への登学自粛期間があったが、その間は翻訳の確認作業をオンラインによって行った。内容に誤りがあれば、全て訳者に責があることを最後に述べておきたい。（賈文夢・野上建紀）

106 曹永和著、陳宗仁、陳怡甫合訳、「17世紀は東亜中継地である台湾」、「台湾風物」、48：3（1998年9月）、ページ105-106。

付録：

次の各表は1688年のマニラ税関によってまとめられた帳簿《Testimonio a la letra de todos los registros de visitas de champanes y pataches que han venido al comercio de estas islas desde el año de 1657 hasta el de 1684, que llegó a gouernar estas islas el señor Almirante de galeones, D. Gabriel de Curuzelaegui y Arriola, cauallero del orden de Sanctiago. Quaderno 2, que llama al tercero》に基づいて分類して整理する。(各表は船の入港日と商品リストの順に並べられている。)

表 1 - 1 : 1664-1664年における大員発マニラ着の船舶の入港日と船舶数

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	総計
1664					5/6(1)		1
1665		2/4(1)		4/18(2) 4/20(1)		6/1(1)	5
1666			3/15(1)	4/2(1)			2
1667			3/24(1) 3/28(1)				2
1668		2/9(1)	3/24(1)	4/5(1) 4/28(1)			4
1669							0
1670		2/19(1)	3/29(2)	4/1(3) 4/3(1) 4/14(1)			8
1671					5/11(1)		1
1672			3/16(1)	4/19(1) 4/28(1)	5/14(1)		4
1673	1/19(1)				5/27(1) 5/29(1)	6/5(1)	4
1674			3/1(1)		5/4(1) 5/22(1)		3
1675			3/10(1)				1
1676	1/15(1)			4/18(1)			2
1677				4/24(1)			1
1678				4/5(1)			1
1679		2/8(1)					1
1680					5/2(1)		1
1681	1/18(1)	2/3(1)	3/28(1)		5/10(1)		4
1682		2/18(1)		4/15(1)			2
1683				4/11(1)		6/3(1)	2
1684	1/31(1)		3/4(1)				2
総計	4	6	11	18	9	3	51

表1-2：1664-1684年における大員発マニラ着の船舶の種類及び船主／船長

到着年月日	船の種類	船主／船長	到着年月日	船の種類	船主／船長
1664/5/6	舢舨	Bueyua	1672/5/14	舢舨	Chuqua
1665/2/4	舢舨	Jeanlao	1673/1/19	舢舨	Sucia
1665/4/18	舢舨	Tequa	1673/5/27	舢舨	Emqua
1665/4/18	舢舨	Chunqua	1673/5/29	舢舨	Tianqua
1665/4/20	舢舨	Saqua	1673/6/5	舢舨	Guanqua
1665/6/1	舢舨	Sunqua	1674/3/1	舢舨	Sucia
1666/3/15	舢舨	Saqua	1674/5/4	舢舨	Anqua
1666/4/2	舢舨	Tianqua	1674/5/22	舢舨	Buanqua
1667/3/24	舢舨	Ania Chiqua	1675/3/10	舢舨	Tonqua
1667/3/28	舢舨	Tianqua	1676/1/15	舢舨	Chanqua
1668/2/9	舢舨	Diqua	1676/4/18	舢舨	Jonqua
1668/3/24	舢舨	Joequa/Quequa	1677/4/24	舢舨	Tonqua
1668/4/5	舢舨	Yuqua	1678/4/5	舢舨	Tianqua
1668/4/28	舢舨	Diqua	1679/2/8	舢舨	Chusia
1670/2/19	舢舨	Chussia	1680/5/2	舢舨	Jayqua
1670/3/29	舢舨	Juequa	1681/1/18	舢舨	Luiqua
1670/3/29	舢舨	Yonqua	1681/2/3	舢舨	Henqua
1670/4/1	舢舨	Guanqua	1681/3/28	舢舨	Anqua
1670/4/1	舢舨	Samsia	1681/5/10	舢舨	Siqua
1670/4/1	舢舨	Hequa	1682/2/18	舢舨	Jaunio
1670/4/3	舢舨	Tianqua	1682/4/15	舢舨	Fuanqua
1670/4/14	舢舨	Chiqua	1683/4/11	舢舨	Yuqua
1671/5/11	舢舨	Chanchua	1683/6/3	舢舨	Tianqua
1672/3/16	舢舨	Samsia	1684/1/31	舢舨	Somblao
1672/4/19	舢舨	Penqua	1684/3/4	舢舨	Tiognio
1672/4/28	舢舨	Tianqua			

表2：中国や日本から大員に着港あるいは寄港予定の船が、海況によってマニラ湾に上陸した船の入港日、船数、船の種類と船主／船長

到着年月日	船舶数	船隻類型	船主／船長
1671/9/5	1	舢舨（本来は日本から台湾行き）	Teçia
1672/12/31	1	小舢舨（本来は中国から台湾行き）	Chi(u)qua
1677/3/20	1	小舢舨（本来は中国から台湾行き）	Poqua
1679/1/24	1	舢舨（本来は中国から台湾行き）	Quiqua
1681/2/3	1	舢舨（直接台湾からマニラに行かない船）	Chenqua
1683/1/11	1	舢舨（本来は日本から台湾行き）	Bauqua
1683/1/27	1	舢舨（本来は日本から台湾行き）	Chancia
1684/2/7	1	舢舨（本来は中国から台湾行き）	Penqua
1684/2/16	1	舢舨（本来は日本から台湾行き）	Chonqua
1684/2/16	1	舢舨（本来は日本から台湾行き）	Tenqua
総計	10		

表3：台湾船がフィリピンに輸出した mantas（布）の数量及び価格一覧表

到着年月日	布（箱/包数）	1 件あたりの長さ（varas）	1 包あたりの件数	単価（リアル/ペソ）	総額（リアル）
1665/2/4	10（安海無地布）	14	60	10r.	6000
	10（藍布）		60	10r.	6000
	6（無地布）		30	10r.	1800
	10（日本布）		80	1 p.	6400
	2（Ysines 布）		60	14r.	1680
	10（厚布）		60	1 p.	4800
1665/4/18	8（日本布）		25	1 p.	1600
	60（日本布）		25	1 p.	12000
1665/4/18	60（日本布）		25	1 p.	12000
1665/4/20	60（日本布）		25	1 p.	12000
	23（日本藍布）		25	1 p.	4600
1665/6/1	8（日本布）		60	1 p.	3840
1666/3/15	10（日本黒布）		60	6 r.	3600
	5（日本布）		25	6 r.	750
	5（日本條紋小布）		50	5 r.	1250
1666/4/2	4（日本布）		80	6 r.	1920
	1（藍布）		60	12r.	720
1667/3/24	40（日本布）		25	1 p.	8000
	20（コーチシナ布）		20	10r.	4000
	3（條紋日本布）		50	8 r.	1200
1667/3/28	20（日本布）		25	1 p.	4000
	10（條紋日本布）		50	1 p.	4000
1668/2/9	20（日本布）		30	10r.	6000
	20（Lamio 無地布）		35	12r.	8400
1668/3/24	10（安海布）		60	14r.	8400
	10（藍布）		60	14r.	8400
	10（日本布）		30	1 p.	2400
	5（taficiras 日本布）		80	6 r.	2400
	10（コーチシナ無地布）		35	2 p.	5600
	10（コーチシナ生藍布）		35	18r.	6300
	5（日本布）		30	10r.	1500
1668/4/5	10（安海布）		50	14r.	7000
	10（コーチシナ無地布）		35	2 p.	5600
	20（taficiras 日本布）		30	10r.	6000
	5（藍布）		60	14r.	4200
	2（日本布）		80	6 r.	960
	3（Lanquin 窄布）		9-10	80	10r.

	5 (日本藍布)		30	11r.	1650
	10 (中国藍布)		50	2 p.	8000
	10 (藍、白日本布)		30	10r.	3000 (計 38810)
1668/ 4 /28	20 (安海布)		60	14r.	16800
	20 (日本布)		30	10r.	6000 (計 22800)
1670/ 2 /19	15 (Inssines 布)		50	12r.	9000
	5 (Cangan 布)		60	1 p.	2400
	5 (條紋 taficiras 窄日本[布])		80	6 r.	2400
	20 (日本布)		30	1 p.	4800
	16 (安海白布)		60	10r.	9600
	20 (日本藍布)		30	9 r.	5400
	5 (コーチシナ布)		30	14r.	2100 (計 35700)
1670/ 3 /29	5 (Insines 布)		50	-	-
	5 (安海布)		60	1 p.	2400
	10 (日本布)		30	6 r.	1800
	5 (安海藍布)		60	9 r.	2700
	10 (日本藍布)		30	6 r.	1800
	4 (Lanquin 布)	8 - 9	60	1 p.	1920
					(計 10620以上)
1670/ 3 /29	5 (日本布)		30	6 r.	900
	4 (Insines 布)		50	10r.	2000
	10 (安海布)		60	1 p.	4800
	5 (Inçines 布)		50	10r.	2500
	5 (日本布)		30	6 r.	900 (計 11100)
1670/ 4 / 1	4 (Insines 布)		50	10r.	2000
	3 (安海藍布)		60	1 p.	1440
	5 (日本布)		30	6 r.	900
	10 (日本藍布)		30	6 r.	1800 (計 6140)
1670/ 4 / 1	4 (安海布)		60	1 p.	1920
	8 (日本布)		30	6 r.	1440
	2 (Insines)		50	10r.	1000
	4 (Lanquin 布)	8 - 9	60	1 p.	1920
	5 (日本藍布)		30	7 r.	1050
	5 (安海藍布)		60	9 r.	2700 (計 10030)
1670/ 4 / 1	4 (Inçines)		50	10r.	2000
	5 (安海布)		60	1 p.	2400
	10 (日本布)		30	6 r.	1800
	5 (コーチシナ布)		30	14r.	2100
	1 (Lanquin 布)		60	1 p.	480
	2 (安海藍布)		60	9 r.	1080 (計 9860)
1670/ 4 / 3	5 (Insines 布)		60	1 p.	2400

	6 (安海布)		60	1 p.	2880	
	5 (安海藍布)		60	9 r.	2700	
	10 (日本布)		30	6 r.	1800	
	4 (日本布)		30	7 r.	840	(計 10620)
1670/ 4 /14	10 (Insines)		50	10r.	5000	
	5 (安海布)		60	1 p.	2400	
	20 (日本布)		30	6 r.	3600	
	5 (Lanquin 布)		60	1 p.	2400	
	4 (藍布)		60	9 r.	2160	
	11 (日本藍布)		30	7 r.	2310	
	5 (コーチシナ布)		30	14r.	2100	
	10 (Inçines)		50	10r.	5000	(計 24970)
1671/ 5 /11	10 (Insines)		60	1 p.	4800	
	10 (日本布)		30	6 r.	1800	
	5 (安海無地布)		60	9 r.	2700	
	6 (條紋 taficiras 日本[布])	8	60	6 r.	2160	
	4 (白布)	12	60	9 r.	2160	(計 13620)
1672/ 3 /16	6 (Inzines)		60	1 p.	2880	
	4 (Lanquin 布)	10	60	1 p.	1920	
	4 (藍布)		60	9 r.	2160	
	4 (安海布)		60	9 r.	2160	(計 9120)
1672/ 4 /19	6 (Inzines)		60	1 p.	2880	
	4 (安海無地布)		60	9 r.	2160	
	4 (Cangan 藍布)		60	9 r.	2160	
	6 (日本布)		30	1 p.	1440	(計 8640)
1672/ 4 /28	4 (Ynsines)		60	1 p.	1920	
	6 (安海布)		60	9 r.	3240	
	4 (Cangan 布)		80	1 p.	2560	
	6 (日本布)		30	1 p.	1440	(計 9160)
1672/ 5 /14	2 (Insines)		60	1 p.	960	
	4 (藍布)		60	9 r.	2160	
	6 (日本布)		30	1 p.	1440	
	2 (無地布)		60	9 r.	1080	(計 5640)
1673/ 1 /19	3 (安海藍布)	14	60	10r.	1800	
	3 (安海白布)		60	10r.	1800	
	4 (Lanquin 藍布)	10	70	9 p.	2520	
	5 (Ynsines)		60	10r.	3000	(計 9120)
1673/ 5 /27	4 (Ynsines)		60	10r.	2400	
	4 (Lanquin 布)	10	60	9 r.	2160	
	4 (Tanua 布)	11	60	1 p.	1920	
	2 (安海布)		60	10r.	1200	(計 7680)

1673/5/29	3 (Ynsines)	10	60	10r.	1800	(計 5040)
	2 (Lanquin 布)		60	9 r.	1080	
	4 (日本布)		30	1 p.	960	
	2 (安海布)		60	10r.	1200	
1673/6/5	2 (Ynsines)	10	60	10r.	1200	(計 4560)
	4 (Lanquin 布)		60	9 r.	2160	
	2 (安海布)		60	10r.	1200	
1674/5/4	4 (黒 Insines)	11	80	7 r.	2240	(計 7120)
	3 (Lanquin 布)		70	1 p.	1680	
	20 (日本布)		20	1 p.	3200	
1674/5/22	10 (Lanquin 布)	11	30	1 p.	2400	(計 8560)
	6 (安海布)		30	1 p.	1440	
	8 (Lanquin 藍布)		30	9 r.	2160	
	8 (Ynsines)		40	1 p.	2560	
1675/3/10	2 (Lanquin 布)	11	60	1 p.	960	(計 4670)
	5 (安海布)		70	7 r.	2450	
	2 (安海藍布)		70	9 r.	1260	
1676/1/15	2 (Ynsines)	6	80	6 r.	960	(計 4650)
	4 (コーチシナ窄布)		60	7 r.	1680	
	3 (Lanquin 布)		70	1 p.	1680	
	6 (Lanquin 窄布)		10	4 r.	240	
1676/4/18	8 (安海無地布)	6 - 7	60	6 r.	2880	(計 6080)
	2 (Incines)		80	7 r.	1120	
	3 (Lanquin 布)		70	1 p.	1680	
	10 (Lanquin 窄布)		10	4 r.	400	
1677/4/24	10 (安海無地布)		60	7 r.	4200	(計 15500)
	10 (Lanquin 布)		70	7 r.	4900	
	10 (Ynsines)		80	1 p.	6400	
1678/4/5	8 (藍布)		70	4 r.	2240	(計 4640)
	6 (白布)		40	6 r.	1440	
	12 (日本布)		20	4 r.	960	
1679/2/8	10 (Incines)		30	-	-	
	10 (藍布)		25	-	-	
	15 (無地布)		25	-	-	
1681/5/10	20 (Lanquin 無地布)		20	-	-	
	20 (広東無地布)		15	-	-	
1682/2/18	8 (無地布)		20	-	-	
	4 (藍布)		20	-	-	
1682/4/15	15 (無地布)		15	-	-	
	20 (Lanquin 白布)		10	-	-	
1683/4/11	8 (Quinolayes 藍布)		20	-	-	

	2 (無地布)		20	-	
1683/6/3	10 (無地布)		25	-	-
1684/1/31	5 (コーチシナ無地布)		20	-	-
	4 (藍布)		20	-	-

(付記：単価の r. はレアルの略記を表している。p. はペソの略記。)

表 4：台湾船がフィリピンに輸出した綿麻布類の数量、単価及び価格等一覧表

到着年月日	棉麻布 (包数)	每件長さ (varas)	1 包件数	単価 (レアル/ペソ)	総額 (レアル)
1665/2/4	2 (安海藍麻布)		80	1 p.	1280
	2 (藍麻無地布)		80	1 p.	1280 (計 2560)
1666/4/2	2 (安海生麻布)		80	9 r.	1440
1668/3/24	2 (安海麻)		60	14r	1680
	2 (Inzon 麻)		60	3 p.	2880 (計 4560)
1668/4/5	2 (安海無地麻)		60	-	-
1668/4/28	2 (安海素麻)		60	14r.	1680
1670/2/19	5 (Inson 白麻)		40	2 p.	3200
	5 (Inson 無地麻)		40	2 p.	3200
	5 (Taupac 麻)		60	12r.	3600
	10 (安海麻)		70	9 r.	6300
	10 (Banchar 白麻)		70	1 p.	5600 (計 21900)
1670/3/29	5 (Taupac 白麻)		60	12r.	3600
	5 (Inson 生麻)		40	12r.	2400
	4 (Inson 白麻)		40	12r.	1920
	10 (安海麻)		60	1 p.	4800 (計 12720)
1670/3/29	6 (Taupac 麻)		60	12r.	4320
	5 (Inzon 麻)		40	12r.	2400
	4 (Inzon 無地麻)		40	12r.	1920 (計 8640)
1670/4/1	3 (Inson 無地麻)		40	12r.	1440
	3 (Inson 白麻)		40	12r.	1440
	10 (Taupac 麻)		60	12r.	7200
	3 (Taupac 無地麻)		60	12r.	2160 (計 12240)
1670/4/1	2 (Insson 麻)		40	12r.	960
	3 (Insson 白麻)		40	12r.	1440
	4 (安海麻)		60	1 p.	1920 (計 4320)
1670/4/1	2 (Inzon 麻)		40	12r.	960
	5 (安海麻)		80	1 p.	3200
	2 (Taupac 麻)		60	12r.	1440 (計 5600)
1670/4/3	4 (Taupac 麻)		60	12r.	2880
	4 (Inzon 無地麻)		40	12r.	1920
	4 (Inzon 白生麻)		40	12r.	1920

	4 (Cacui 麻)		80	1 p.	2560 (計 9280)
1670/ 4 /14	10 (Inzon 無地麻)		40	12r.	4800
	10 (Inzon 白麻)		40	12r.	4800
	8 (安海麻)		60	1 p.	3840
	4 (Taupac 麻)		60	12r.	2880
	4 (Inzon 麻)		40	12r.	1920 (計 18240)
1671/ 5 /11	4 (Inson 白麻)		70	12r.	3360
	4 (Inson 素麻)		70	12r.	3360
	6 (Taupac 麻)		80	7 r.	3360
	6 (安海無地麻)		70	6 r.	2520 (計 12600)
1672/ 3 /16	4 (Inson 無地麻)		60	10r.	2400
	8 (安海無地麻)		80	5 r.	3200
	4 (Taupac 白麻)		65	6 r.	1560
	3 (沙藍布)		35	3 p.	2520 (計 9680)
1672/ 4 /19	5 (Inzon 無地麻)		60	10r.	3000
	2 (Taupac 白麻)		80	6 r.	960 (計 3960)
1672/ 4 /28	4 (Ynson 無地麻)		60	10r.	2400
	6 (無地麻)		80	6 r.	2880
	2 (Taupac 麻)		80	6 r.	960
	3 (做內襯藍麻)		80	6 r.	1440 (計 7680)
1672/ 5 /14	2 (Taupac 白麻)		80	6 r.	960
	4 (安海無地麻)		80	6 r.	1920
	2 (藍麻)		80	6 r.	960 (計 3840)
1673/ 1 /19	4 (Inson 無地麻)		70	14r.	3920
	2 (Ynson 白麻)		70	14r.	1960
	5 (Taupac 白麻)		70	5 r.	1750
	5 (Taupac 無地麻)		70	5 r.	1750
	3 (沙藍布)	16	40	2 p.	1920
	3 (沙藍布)		60	12r.	2160
	3 (藍麻)		100	5 r.	1500 (計 14960)
1673/ 5 /27	4 (Ynson 無地麻)		70	14r.	3920
	3 (安海無地麻)		70	6 r.	1260
	2 (藍麻)		100	5 r.	1000 (計 6180)
1673/ 5 /29	5 (Ynson 無地麻)		70	14r.	4900
	4 (Taupac 無地麻)		70	6 r.	1680 (計 6580)
1673/ 6 / 5	4 (Ynson 無地麻)		70	14r.	3920
	4 (安海麻)		70	5 r.	1400
	2 (藍麻)		100	5 r.	1000 (計 6320)
1674/ 5 / 4	5 (Inson 無地麻)		80	10r.	4000
	6 (Taupac 麻)		80	6 r.	2880
	3 (狹窄 candaquí)	6	100	4 r.	1200 (計 8080)

1674/ 5 /22	2 (安海素麻)		100	4 r.	800	(計 4400)
	2 (Ynson 白麻)		60	10r.	1200	
	8 (安海麻)		60	5 r.	2400	
1675/ 3 /10	4 (Ynson 麻)		80	9 r.	2880	(計 3360)
	4 (Ynson 素麻)		80	9 r.	560	
	10 (安海素麻)		100	4 r.	400	
	3 (インド黒細棉麻布)	6.5	120	4 r.	1440	
	4 (Taupac 麻)		100	4 r.	400	
1676/ 1 /15	6 (Ynson 白麻)		80	9 r.	4320	(計 8160)
	6 (安海麻)		100	4 r.	2400	
	3 (Taupac 無地麻)		80	6 r.	1440	
1676/ 4 /18	5 (Inzon 白麻)		80	9 r.	3600	(計 6480)
	6 (Taupac 無地麻)		80	6 r.	2880	
1677/ 4 /24	10 (Ynson 白麻)		80	1 p.	6400	(計 27200)
	10 (Ynson 無地麻)		80	1 p.	6400	
	20 (Taupac 白麻)		80	6 r.	9600	
	10 (Taupac 無地麻)		80	6 r.	4800	
1678/ 4 / 5	6 (素麻)		40	4 r.	960	
1679/ 2 / 8	10 (Inson 白麻)		20	-	-	
	4 (Inson 無地麻)		20	-	-	
	10 (無地厚麻)		40	-	-	
	15 (藍麻)		30	-	-	
1681/ 2 / 3	5 (Inson 白麻)		100	-	-	
1681/ 3 /28	4 (無地麻)		25	-	-	
1682/ 2 /18	4 (無地麻)		22	-	-	
	4 (Taupac 麻)		35	-	-	
	4 (Taupac 無地麻)		30	-	-	
1682/ 4 /15	7 (Taupac 無地麻)		50	-	-	
	8 (Taupac 白麻)		30	-	-	
	6 (Inson 白麻)		20	-	-	
	6 (Inson 無地麻)		20	-	-	
1683/ 4 /11	6 (白麻)		25	-	-	
	4 (無地麻)		25	-	-	
1683/ 6 / 3	8 (白麻)		22	-	-	
	6 (無地麻)		22	-	-	
1684/ 1 /31	2 (Inson 無地麻)		24	-	-	
	3 (Inson 白麻)		24	-	-	
1684/ 3 / 4	5 (無地麻)		23	-	-	

(付記：単価の r. はレアルの略記を表している。p. はペソの略記。)

表5：台湾船がフィリピンに輸出した生糸の数量と価格等一覧表

到着年月日	生糸（箱／包数）	1担価格 （ペソ）	1箱／包重量	1斤の価格 （レアル）	総量（斤）	総額 （レアル）
1665/2/4	2	450	1担	36	200	7200
1666/3/15	2	400	70斤	32	140	4480
1666/4/2	1	400	80斤	32	80	2560
1668/2/9	2	500	50斤	40	100	4000
1668/3/24	2	500	60斤	40	120	4800
1668/4/5	2	450	60斤	36	120	4320
1670/2/19	2	450	1担	36	200	7200
1670/3/29	1	400	1担	32	100	3200
1670/3/29	1	400	1担	32	100	3200
1670/4/1	2	400	1担	32	200	6400
1670/4/1	1	400	1担	32	100	3200
1670/4/1	1	400	1担	32	100	3200
1670/4/3	2	400	1担	32	200	6400
1670/4/14	3	400	1担	32	300	9600
	2	400	1担	32	200	6400
1671/5/11	2	350	1担	28	200	5600
1672/3/16	2（小生糸）	350	70斤	28	140	3920
1672/4/19	2	350	1担	28	200	5600
1672/4/28	2	350	80斤	28	160	4480
1672/5/14	1	400	1担	32	100	3200
1673/1/19	2	400	80斤	32	160	5120
1673/5/27	2（黄生糸）	300	80斤	24	160	3840
1673/5/29	2	400	80斤	32	160	5120
1673/6/5	2（黄生糸）	300	80斤	24	160	3840
1674/5/4	3	400	1担	32	300	9600
1674/5/22	2	350	60斤	28	120	3360
1677/4/24	2	400	80斤	32	160	5120
1679/2/8	3	-	50斤	-	150	-
1681/2/3	4	-	1担	-	400	-
1681/3/28	6（広南糸）	-	1担	-	600	-
	2（劣質糸）	-	1担	-	200	-
1681/5/10	10	-	50斤	-	500	-
	3（紬）	-	40斤	-	120	-
	2担劣質白糸	-	-	-	200	-
	5担粗糙糸	-	-	-	500	-
1682/4/15	3	-	-	-	-	-

（1ピクル（pico）は約100斤（cates）で、1斤は632.63グラムで、1ペソは8レアル。）

表6：台湾船がフィリピンに輸出した金属の数量一覧表

到着年月日	鉄総量 (担)	銅総量 (箱/ペソ)	鉛総量 (担)
1665/2/4	26 (日本純鉄, 釘を含む)		
1665/2/4	20 (日本純鉄)		50
1665/4/18	60 (日本純鉄棒)		
1665/4/18	80 (日本純鉄)		
1665/4/20	50 (日本純鉄棒)		
1666/3/15	60 (日本鉄)		
1666/4/2	30 (生鉄)		
1667/3/24	100 (日本鉄)		
1667/3/28	50 (鉄)		
1668/2/9	40 (日本純鉄)		
1668/3/24	40 (日本純鉄)		
1668/4/5	5 (日本鉄)		
1668/4/28	60 (日本鉄)		
1670/2/19	80 (日本鉄)		
1670/3/29	40 (日本鉄)		
1670/3/29	50 (日本鉄)		
1670/4/1	100 (日本鉄)		
1670/4/1	40 (日本鉄)		
1670/4/3	50 (日本鉄)		
1670/4/14	50 (日本鉄)		
1670/5/11	20 (日本鉄)		
1672/3/16	50 (日本鉄)		
1672/4/19	50 (日本鉄)		
1672/4/28	50 (日本鉄)		
1672/5/14	50 (日本鉄)		
1673/1/19	50 (日本鉄)		
1673/5/27	60 (日本鉄)		
1673/5/29	50 (日本鉄)		
1673/6/5	30 (純鉄)		
1674/5/4	30 (日本鉄)		
1674/5/22		20箱 (1箱90斤、1担=14ペソ)	少量
1675/3/10	50 (日本鉄)		
1676/1/15	50 (中国粗鉄)		
1674/4/18	50 (中国粗鉄)		
1681/1/8	-	35箱 (1箱1担)	
1681/2/3	-	20担	
1681/2/3	-	150担	30担
1681/3/28	54 (日本純鉄)		70担
1681/5/10	50 (鉄)		50担

1682/2/18	-	12箱	
1682/4/15	-	20箱（1箱1担）	
1683/4/11	80（粗鉄）		
1684/3/4	100（日本粗鉄）		

表7：台湾船がフィリピンに輸出した sayasayas の数量と価格等一覧表

到着年月日	梱数	毎梱件数	単価(ペソ/レアル)	総額(レアル)
1665/2/4	2	50	4 p.	3200
1667/3/24	1	100	4 p.	3200
1668/2/9	2 (Lanquin)	50	4.5p.	3600
1668/3/24	2	55	4.5p.	3960
1668/4/5	2	55	4.5p.	3960
1668/4/28	2	60	4.5p.	4320
1670/2/19	2	100	3 p.	4800
1670/3/29	2	100	20r.	4000
1670/3/29	2	100	20r.	4000
1670/4/1	2	100	20r.	4000
1670/4/1	1	100	20r.	2000
1670/4/1	1	100	20r.	2000
1670/4/3	3	100	20r.	6000
1670/4/14	3	100	20r.	6000
	2	100	20r.	4000
1671/5/11	2 (女児用)	100	2 p.	3200
1672/3/16	2	100	20r.	4000
1672/4/19	2	90	20r.	3600
1672/4/28	2	100	20r.	4000
1672/5/14	2	90	20r.	3600
1673/1/19	2	100	20r.	4000
1673/5/27	2	100	20r.	4000
1673/5/29	2	100	20r.	4000
1673/6/5	2	100	20r.	4000
1674/5/4	2	100	2 p.	3200
1674/5/22	2	100	2 p.	3200
1677/4/24	2	100	2 p.	3200
1678/4/5	2	50	15r.	1500
1681/2/3	2 (共300件)	-	-	-
1681/3/28	4 (共500件)	-	-	-
1681/5/10	3	100	-	-
1682/2/18	2 (共100件)	-	-	-
1682/4/15	200件白 sayasayas	-	-	-
1683/4/11	5 (白 sayasayas)	80	-	-

1683/6/3	3 (白 sayasayas)	150	-	-
----------	-----------------	-----	---	---

(付記：単価の r. はレアルの略記を表している。p. はペソの略記。)

表 8：台湾船がフィリピンに輸出した漁網縄、麻縄及び白糸の数量と価格等一覧表

到着年月日	漁網縄 (包/1包=1担)	每斤価格 (リアル)	麻縄/白糸 (担/包)	単価 (ペソ)
1665/2/4	4	2		
1666/3/15	2	3		
1667/3/24	2	3		
1667/3/28	2	3	2 (白糸、1包60斤)	1斤1ペソ
1668/2/9	3	3		
1668/4/5	3	3		
1668/4/28	2	3		
1670/2/19	5	2		
1670/3/29	4	2		
1670/3/29	3	2		
1670/4/1	2	12		
1670/4/1	2	2		
1670/4/3	3	2		
1670/4/14	4	12		
1671/5/11	3	2		
1672/3/16	2	2		
1672/4/19	2	2		
1672/4/28	2	2		
1673/5/27	2	2		
1673/5/29	3	2		
1673/6/5	3	2		
1674/5/4	4	2		
1675/3/10	8	2		
1676/4/18	5	2		
1678/4/5			5 (麻縄)	1担=26ペソ
1679/2/8	15	-		
1681/2/3	10	-		
1681/3/28			20 (麻縄) 1 (白糸、共1担60斤)	
1681/5/10			5 (麻縄)	
1682/2/18			2 (麻縄)	
1684/1/31			2 (麻縄) 1 (白糸)	

(1ピクル (pico) は約100斤 (cates) で、1斤は632.63グラムで、1ペソは8リアル。)

表9：台湾船がフィリピンに輸出した麦の数量一覧表

到着年月日	総数(担)	到着年月日	総数(担)	到着年月日	総数(担)
1664/5/6	300	1670/2/19	60	1672/4/28	30
1665/2/4	100	1670/3/29	50	1672/5/14	100
1665/4/18	200	1670/3/29	40	1673/5/27	5
1665/4/18	200	1670/4/1	70	1673/5/29	50
1666/3/15	200	1670/4/1	30	1673/6/5	50
1666/4/2	150	1670/4/1	100	1674/5/4	30
1667/3/24	50	1670/4/3	50	1675/3/10	30
1667/3/28	100	1670/4/14	50	1676/4/18	50
1668/2/9	20	1670/5/11	30	1683/6/3	148
1668/3/24	50	1672/3/16	50	1684/1/31	650
1668/4/5	50	1672/4/19	40	1684/3/4	100

表10：台湾船がフィリピンに輸出した付帯的商品の種類と価格等一覧表

到着年月日	貨品種類	総額(ペソ)	到着年月日	貨品種類	総額(ペソ)
1665/2/4	無記載	400	1672/4/28	carahayes、陶磁器、中国の食物	400
1665/4/18	無記載	500	1672/5/14	糖、carahayes、食物	500
1665/4/18	陶磁器、書き物机、鍋、その他日本からの物品など	800	1673/1/19	carahayes、その他	500
1665/4/20	無記載	600	1673/5/27	糖、陶磁器、carahayes、その他	1200
1665/6/1	無記載	700	1673/5/29	陶磁器、carahayes、石膏	600
1666/3/15	文具箱、陶磁器、その他	1000	1673/6/5	carahayes、陶磁器、石膏、その他	600
1666/4/2	文具箱、日本皿、煙草、その他	500	1674/5/4	陶磁器、carahayes、その他中国の食物	500
1667/3/24	無記載	100	1674/5/22	carahayes、陶磁器、少量の鉛	400
1667/3/28	陶磁器、中国煙草と中国靴	500	1675/3/10	陶磁器、carahayes、その他	500
1668/2/9	無記載	100	1676/1/15	無記載	300
1668/3/24	陶磁器、carahayes、煙草、その他	600	1676/4/18	陶磁器、carahayes、紙、その他食物	600
1668/4/5	carahayes、皿、陶磁器、その他	700	1677/4/24	無記載	500
			1678/4/5	無記載	500
1668/4/28	無記載	300	1679/2/8	無記載	400
1670/2/19	carahayes、その他	500	1681/1/8	敷物、紙、carahayes、その他食品	1600
1670/3/29	無記載	300			

1670/3/29	煙草、carahayes、陶磁器、紙	500	1681/2/3	陶磁器、carahayes、紙、敷物、その他	3200
1670/4/1	紙、陶磁器、carahayes	500	1682/3/28	無記載	1500
1670/4/1	無記載	300	1681/5/10	敷物	?
1670/4/1	陶磁器、carahayes、紙、犁、中国煙草	500	1682/2/18	無記載	1400
			1682/4/15	無記載	1000
1670/4/3	陶磁器、紙、茶、carahayes、煙草	400	1683/4/11	敷物など	1700
1670/4/14	陶磁器、carahayes、中国煙草と紙	500	1683/6/3	無記載	2220
1671/5/11	carahayes、その他	500			
1672/3/16	陶磁器、carahayes、その他	500			
1672/4/19	碗、陶磁器、carahayes、その他食物	400			